
ss Story`s ~ Another World`s/Cross Greeed`s ~

MUGEN KAI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

OOO Cross Storys \ Another World、s / Cross Greed、s \

【Nコード】

N9001X

【作者名】

MUGEN KAI

【あらすじ】

欲望が交わりし地、ミッドチルダ。

ここに、欲望の使徒達が、なにかに呼ばれるように集結した！

ある者は正義のため、ある者は救済のため、ある者は真偽を確かめるために・・・。

ここに、OOOの異世界戦記が始動する！！

この小説を読んでいただく前に、「純正なる正義の使徒 異世界・

飛蝗の跳躍」「救える手”を求める欲望 異世界・恐竜の奔走」
「悲しき救世主と欲望達 異世界・青年の終わりのなき旅の続き」の
続編となっているため、この短編群を讀んでいただくことをお勧め
します。

N e x t O O O N o w L o a d i n g ｝ C o m e O N ! O O O

この小説は仮面ライダーオーズのI F E N Dの世界×魔法少女リリカルなのはS t r i k e r sのクロスオーバーのF F小説となっています。

基本一定量更新した後は一カ月〜二ヶ月に一回の更新となる・・・はず、だよね？自分？

この小説を読んでいただく前に、あらすじ欄で述べてある作品群の続編であるため、それらの購読をしていただくとありがたいです。

OOO これまでのダイジェスト！

800年前、欲望により作られしメダルの異形、グリード。

グリードにより作られし、ヤミー。

グリードの核となっているコアメダルを使いし者、オーズ。

人間とグリードによる欲望の戦い・・・それは、オーズの器である火野映司によって終結、映司は後ろ髪を引っ張られる感覚を覚えながらも、グリードらと一緒に、クスクシエの面々から姿をふつりと消した。

その裏で、ミッドチルダで起こった3つの出来事！

1つ！

一枚のセルメダルから復活したバッタヤミーは、とあるバスジャック事件から始まり、ミッドチルダの悪を、直感のままに懲悪していく！

2つ！

砕かれたはずの紫のメダルから生まれた紫のグリードは、とあるデパートの爆発事故に遭遇、自分の存在理由を探しながら、事故に巻き込まれた1人の少女はじめの多数の人々をグリードの力によって助けた！

3つ！

旅の途中、鴻上からミッドチルダの存在、そしてそこにある都市伝説を聞き、その真偽を確かめるため、火野映司ら一行、伊達明がミッドチルダに降り立った！

バッタヤミー、紫グリード、火野映司はじめグリード一行、伊達明、
そして機動六課。

異世界での交わりは、新たな物語へと!!

u b e N e x t C o m i n g O O O ! ! C a n y o
b e H E R O ?

この日、19歳のうら若き女性が、広い部屋で1人頭を悩ませている。

ここはミッドチルダの中心地から少し離れた、機動六課の隊舎。

さらに言うならば、この女性、八神はやてが1人頭を痛ませている場所は、部隊のトップが居座る機動六課部隊長室、言いたいことをまとめるならば、この妙に広い空間、映像に目をやりながら眉間にしわを寄せているこの人物、八神はやてが、ここ機動六課のトップに立つ人物であることを言いたい。

機動六課・・・約一カ月前に起こった、次元史に残る大規模な事件、J・S事件。

この事件の解決に大きな一役を買い、文字通り多大な活躍をし、ミッドチルダに大きく名売れた存在、それが、ここ古代遺物管理部の六課・・・機動六課である

ここの隊舎、実を言うならば、少し前まではただの瓦礫群であった。要因としては、もちろんそのJ・S事件における被害で、J・S事件の爪跡でもあった。

しかし、名が売れ、管理局本部も機動六課の働きに評価を示したためか、この部隊舎の修復が町の復興よりも優先されてしまい、こうして一カ月という短期間で元通りとなってしまう現実がある。働きに評価していくれていることはありがたいが、町の復興より優先されていることを聞いたときは、大いに八神はやて他隊長陣一行が文句を言っていた、という閑話もある。

ともかく、この完璧なまでに修復された部隊舎の部隊長室で、はやては先ほどから大いに頭を悩ませていた。

J・S事件、という大仕事が片付き、その多大な事後処理も、だんだんと落ち着いてきたこの時期、本来ならばここまで苦悩することはないのであろう。

がしかし、彼女をはじめとした管理局の仕事は、あくまで「次元世界の平和と秩序を守ること」。

こういった仕事に関しては、平穩など約束されていないものである。実際問題として、ここ最近、特に2週間前から、ミッドチルダで異変が起きている実情があるのだから。

異変・・・それは、ミッドチルダで広まっている、とある都市伝説。

「人々が悪に対し助けを求めたとき、緑の化け物が、雷撃と跳躍により、完全なる懲悪を行う。しかし、悪の者は、無事では済まされぬ。」

「人々が救いを求めたとき、骸の異形が、その翼、その怪力、その氷結の息によって、無条件の救いの手を差し伸べる。」

ミッドチルダに突如現れた謎の異形、魔法生物の類でもなければ、魔法で変身した人間でもない。

まさに未確認、アンノウンが2週間前に出演したのだ。

これを聞いた人ならば、大体多数の人は「ただの都市伝説」だとあしらうであらう。

だが、実際に目撃した人が多数おり、映像にも残されているのが現実であり、存在が証明されつつあるのが今の現状。

そう断言できる要因・・・それは、機動六課のFWメンバーそれぞれが、その特徴にぴったりの異形と出会っているのだ。

まず緑の化け物・・・これは、ライトニング分隊のエリオとキャロが出会っている。

休暇、とある娯楽施設へと出発していた2人に、突如バスジャック

の魔の手が迫り、目的であるキャロの誘拐遂行の寸前に、その異形が介入、その一味を退治した後に、異形はどこかへと逃げて行ったらしい。

その後、ミッドチルダの都市部を中心として、泥棒から始まり大規模な強盗まで、その異形が介入、解決している。

これを聞いて、誰かが思うであろうか・・・まるで「正義の味方」みたいだと。

実際、遭遇したエリオとキャロも「まるでキャロを助けに来たようであった」と発言しており、実を言うならば、その異形のとある口癖が確認されてあるのだ。

「悪い奴は・・・許さない。」

その行動、その言動、まさに地球のアニメや漫画でよく見る「ヒーロー」。

映像で確認されてある姿だけでは想像できないのだが、そういった実情がある以上、まさに「正義の味方」といっても過言ではないのか？とはやては疑問を抱いている。

もう一方、骸の異形・・・これは、スターズ分隊のスバル、ティアナ、プラスとしてスターズ分隊の隊長である高町なのはが保護している子供、ヴィヴィオが遭遇している。

こちら、同日の休暇、とある新興企業のデパートにやってきた3人が、そのデパートの爆発事故に巻き込まれた時、その異形が介入、ヴィヴィオを2人の元に送り返し、それにとどまらず、大規模な氷結魔法によってデパートの火事を鎮火、多数の人々を救出した後に、管理局の到着を確認した刹那、その場を去って行ったらしい。

とはいったものの、実を言うならば、その異形が行った広範囲の氷結作業、魔法を使った、ということの確証がなく、謎の力によってのもの、と予想されている。

しかし、その規模、氷結の時間を考えるならば、魔力に換算する場合、少なくともA A A、下手をすればSオーバーはくだらないだろう、と予想されている。

その後、ミッドの郊外を中心として、事故や事件から人を守っている異形の姿が確認されている。

こちらは、正義の味方、というよりは、一般的に言われる救助隊員の働きに近い。

実際、事故や事件の現場から救出された人々、そしてスバル、ティアナ、ヴィヴィオは口をそろえて「ほんとに他の人のことを心配してそうで、声だけは、優しそうな男のものであった」と発言している。

この2人の異形によって、ここ最近の事故、事件による死亡者や負傷者が激減、犯罪者の検挙率が大幅アップ、管理局の仕事が大幅に激減している。

つまり、管理局の大多数の局員によって行っている仕事以上の仕事を、その異形2人だけで行っている現実があるのだ。

聞くだけでは大助かり、という印象を受けるであろう。

だが、その2人は異形、いくら善業を行っていても、こちらはその存在に対し、調査し、警戒しなければならぬ現実がある。

正直、異形によって助けられた人の発言を聞いているせいか、どうもその異形には悪いことをしている、という少々の罪悪感が拭えない。

だが、その異形の正体が、どこかの研究所が作った生体兵器などであつたら、ミッド全体が危険にさらされる可能性がある以上、そして、管理局としての仕事である以上、はやては隊を統括するものとして、非情に、毅然であるべきなのだ。

一旦異形に関してのデータ資料を見た後に、はやては新しい2つの画面を展開した。

まず、今日の異形の活動状況に関してのMAP。

異形が力を発揮したり、出現した場合には、その地点に詳細不明のエネルギー反応が感知されることを利用したものだ。

おかげで、ある程度異形の活動状況、発生状況をつかむことはできたのだが、その地点に足を運んだ時には、とつくに異形の姿は無く、あるのは事件の犯人であつたり事故の現場から救出された人であつたりする。

今日も、ひったくり犯の2人が、足を凍らされて拘束されていることが起こり、現在、その2人から異形についての情報を聞き出している最中だ。

もうひとつは、その異形についてのもっとも身近な情報源の写真だ。3日前、異形の現れた現場に落ちていた、一枚の銀のメダル。

分析の結果、魔力でも科学的なものでもない謎のエネルギーの圧縮されたもの、という結果が出ており、現在メダルのさらなる分析を行っている。

「はぁ・・・、まだまだやることは山積みや・・・。」

少々元気がない、はやてのため息交じりのつぶやきが、広い部隊長室に少しばかり響いた。

同時刻、今の時間は一般的に言われるランチ、昼食の時間だ。

機動六課の食堂も、時間に反映して一層と人が多い様子で、たび重なるデスクワークに疲れを表した顔をしている者や、今日のランチはなににしようかと小難しそうな顔をする者など、十人十色の赴きだ。

その中に、これまたハードな実技訓練を終わらせ、いかにもな様子でやってきた4人、紛れもなく、FWメンバーの4人、スターズ分隊のスバルとティアナ、ライトニング分隊のエリオとキャロだ。

この4人、特にスバルとエリオは、機動六課で一番の大喰らいで有名で、この2人にかかれれば10人前の料理がいとたやすくなくなってしまう。

今日も、こぼれそうな大皿に盛られた人外な量のミートスパゲッティを持ち、4人はもはや指定席となつたいつもの場所の、いつもの席順で座り、おもむろに食事を始める。

言葉だけ聞けば、これがいつもの光景なのだろう、と予測できるであろうが、ここ最近での変化が生じている。

それは、この4人プラスこの4人のそばに座り、オムライスをほおばっているヴィヴィオの中にある気持ちだ。

まず、エリオとキャラ、キャラの心の中では、ある後悔の念が渦巻いていた。

それは、「あの異形に、助けてくれてありがとうと言えず、目の前で怖がってしまった」ということ。

キャラはとても純真で、何よりも優しい心の持ち主だ。

キャラの得意とする支援魔法は、その性格が具現化されたのごとく、FWメンバーに温かい守りと力を与えてくれており、その性格が竜の使役につながっているのかもしれない。

そんな心の持ち主である彼女にとっては、そのことにとっても後悔しているのだ。

自分が怖い大人たちに連れ去られようとしたとき、颯爽と現れた緑の異形、その異形は彼女を魔の手から守り抜き、バスにいるエリオまで丁寧に運んでくれた。

だが、それに相反し、先ほどまで置かれていた状況も相まってしまったためか、キャラはその姿、その力に、心の底から恐怖の念を覚えてしまったのだ。

助けてくれた恩人に対しての気持ちではないことは重々に承知、だからこそ今まで後悔し続けている今がある。

エリオも同じようなもので、自分が守れなかったキャラを、傷一つ

つげずに運んでくれた相手に対し、槍型デバイスのストラーダを向け、完全に敵意を表してしまった自分に、あの行動は本当に正しかったのだろうか、自分にはほかにやるべきこと・・・感謝することがなぜできなかったのだ、と自問の螺旋状態となっているのが現状。

炎が迫り、瓦礫が落ちてきた状況で、体を張って助けてもらったヴィヴィオも、キャロとの心境が似ているであろうか。

彼女も、幼子らしい純粹さと優しさを持ち、なにより人の温かさを知っている人物。

あの骸の異形は、自分をまるでパパのごとく心配してくれて、さらにはあのデパートの人々全員すら助けてくれた。

しかし、あの異形が優しき異形だと分かったはずなのに、自分はその姿に悲鳴を上げそうになり、助けを請おうとすら思ってしまったのだ。

あのように、自分は数々の人々に助けられてきた、だからこそ、感謝の大切さも重々に知っている。

だが、あの異形にだけは、自分は感謝を伝えられず、拒絶の意を少しでもあらわにしてしまった。

姿が違うだけで判断するなど、自分の中では持つての他、だが、あの時、自分は外見の恐怖だけを感じ取り、視野を狭めてしまったことに、後悔が渦巻く一方なヴィヴィオであった。

スバルとティアナ、特にティアナに関しては、あの異形の力へと畏怖と、あの異形への疑問、あの時の異形の様子から感じる優しさを信じたい気持ちたちが混沌を形成している。

年長者であるために、自分達は冷静に状況を見なければいけない、それはあの異形にも同じだ。

しかし、あの異形の間人臭いしぐさ、言動、人間以上の人の安否への執着を見ていると、そんな疑念など吹き飛んでしまいそうだ。

しかし、あの6階建てのデパートを、一瞬にして凍らせてしまった

力、普通の魔導師以上の速度を持つ飛行能力、目撃証言から推測した怪力、それを考えると、どうしても異形としての畏怖、疑念が払えないのが現状、平和と秩序を守る管理局員としての判断であろうとティアナは考える。

スバルに言ったつては、ティアナと同じ思考をしていながらも、どちらかと言えば異形に対して一定に信頼を持っている心境だ。

管理局員より速く現場に赴き、人をいち早く助ける様は、自分の理想としているスタイルに準ずるもの、話によれば、一般的な魔力を持つ管理局員が行けないような場所に、必死に行こうとし、人を助けてたい一心でいる骸の異形や、事後処理に追われ、ガサ入れをできずに放置気味となっている犯罪組織の本部に、単独で突撃し、組織を壊滅させた緑の異形が確認されており、その雄姿は、スバルが考える管理局員のあるべき姿の鑑であるからだ。

若いがために迷うのは若い者の特権、それは、それだけ迷う時間を持てるころにあるからだ。

その食堂、4人のような気持ちを抱いている者はこの4人だけではない。

4人の少し離れた場所で、ゆっくりなペースでチャーハンを食べているヴィータ、その横でその体にとってはかなり大きいパンを、その小さな口でほおばっているリインフォース？も異形に遭遇したことがあるのだ。

質量兵器の取引が行われている、と通報を受けたのは4日前。

詳しい内容は、ミッドのとある港で、大量の質量兵器の取引が行われそうだとあるフリーの記者が通報し、それを詳しく調べようと、その取引日に、ヴィータ、リインフォース、シグナム、ザフィラといったヴォルケンリッターの前線メンバーが張り込みを決行した。

その夜、その情報が皮肉にも大ビンゴ、実際に、船に積まれた質量兵器らしき木箱を運搬している集団を見つけ、機を見計らったところで、4人による取り押さえを行った。

もちろんだ、といっているがごとく、その集団はデバイスと、質量兵器である拳銃やマシンガン武装し、4人に対抗した。

犯人の一味は50人前後、最初は20人前後かと思われた戦力であったが、一味は万が一のことも考え、用心棒集団を忍ばせてあったのだ。

用心棒、と言っているからには、それなりの実力があり、炎の変換資質を持つものや、魔力弾に長けているもの、剣に長けているもの、アームドデバイスを持つ格闘に長けているものなど、一者一葉な戦力であり、それのない実力、魔導師が苦手とする質量兵器を行使されたせいか、4人は苦戦を強いられた。

そして、その事態は、不足に起こってしまった。

仲間の1人であるリインが、不意を突かれユニゾンされる前に人質として拘束されてしまったのである。

リインは、魔力はそれなりにあるものの、どちらかと言えば支援を得意とする融合騎、それゆえに不意を突かれれば拘束など簡単であった。

事前にユニゾンを行っていたれば・・・とヴィーター一行は後悔しながらも、人質の存在によって攻撃ができず、防戦一方の不利な展開。増援を頼む方法はないか、と3人が思考していた、その刹那であった。

リインがバインドによって拘束され、一味のリーダー格の存在が拳銃を向ける中、不意に、拳銃を持つ手めがけて緑の電撃が走り、その電撃は拳銃を高熱によって破壊、その後たじろいでいる犯人をよそに、刹那、リインに施されているバインドが破壊され、音速のごとく紫の影がリインを助け出したのである。

いきなりの襲撃に、一味は「管理局か！」と動揺するが、それらの行動を起こした犯人の姿を見た瞬間、一味と、それらと交戦してい

たヴィーター一行、助けられたリインは戦慄した。

一体は、緑の装いを持ち、人型に緑の皮膚を植え付けたような姿、その姿は、ヴィーターが地球で見たバッタに似たものがあつた。

もう一体は、頭は化石の骸、超速飛行によってリインを助けた名残か、背中には大きく広げたしなやかな紫の翼、その装いはまさにバフォメットの異形。

裏社会で一気に広まり、恐怖を知らしめた都市伝説。

「人々が悪に対し助けを求めたとき、緑の化け物が、雷撃と跳躍により、完全なる懲悪を行う。しかし、悪の者は、無事では済まされぬ。」

「人々が救いを求めたとき、骸の異形が、その翼、その怪力、その氷結の息によつて、無条件の救いの手を差し伸べる。」

その都市伝説に伝えられている特徴にぴったりとあてはまるその姿、現場にいるもの達は理解する、そうか、これが都市伝説の存在だ、と。

「あの、この子の味方つて誰ですか？」

「・・・私達だ。」

そう返事したのはシグナム、といっても、友好関係を築こう、という雰囲気はなく、他の2人も臨戦態勢をその異形2人に向けている。一色即発、その異形の姿をみたものは、その行動には納得できるであらう。

だがしかし、外面だけで判断したことを、現場の人たちは知ることとなるのだ。

「この子、腕に怪我をしてるんで、治療してやってください。でも、無事でよかったです。」

「お前たちは逃げる。ここは俺達に任せてくれ。」

「・・・はあ？」

要約するならば、また誰かが怪我をする前に、ここから安全な場所まで言ってくれ、ということだ。

怪我を心配そうに見ている骸の異形、こいつらは任せてくれ、とためらいなく胸を張った緑の異形、その姿からは想像できない自分たちへの配慮に戸惑いを見せるヴィーター一行、しかし、判断の時間はないらしく、一味はその異形に一斉攻撃を仕掛けようとしている。

それに気がついた緑の異形は、リインを丁寧そうに持ち、その自慢の跳躍力でヴィーター一行に接近、警戒を続けている一行をよそに、任せたと一言残しヴィーターにリインを預け、また跳躍によって一味の布陣に突撃した。

その様に恐怖を覚えたためか、はたまた焦りか、一味は一斉に異形2人に攻撃を始めた。

・・・が、その対立は圧倒的であった。

飛び交う魔力弾、斬撃、炎、それに戸惑いや臆病を感じさせず、むしろ余裕すら感じさせる様子で、異形達は攻撃を跳ね除け、一味をなぎ倒していく。

ヴィーター一行がなにより驚いたのは、異形に質量兵器が効かないことであった。

奥の手として使用したマシンガンや拳銃、しかし、異形は被弾をしても動きを少々止めるだけで、まったくダメージとなっていない様子であったのだ。

緑の異形はその脚力と跳躍力を駆使し、格闘を主として一味を倒していく。

骸の異形は氷結の息と飛行能力によって、飛行によって攻撃をかわしつつ、氷結によって生成した氷の弾丸や、紫のエネルギー弾を一味に飛ばし、倒していく。

その様はまさに地球の時代劇のごとくばったばったと行われ、気がつけば5分足らずで一味は全滅していた。

しかし、ヴィーター一行の仕事はまだ終わっていなかった。

「その2人！助けてくれたことには感謝する。しかし、あなた達には少々聞きたいことがある。・・・任意同行、で済みたいのだから。」

とシグナムはデバイスを一旦下げ、こちらに交戦の意思はない、といった意思表示を行う。

といっても、デバイスを下げたのはシグナムだけで、万が一、ということでヴィータとザフィーラは臨戦態勢でいるが。

だが、異形の返事は早かった。

「あー・・・そのー・・・ごめんなさい！」

「すまぬ。」

と異形2人が頭を下げると、骸の異形は翼を一気に広げ、周辺に強風を発生させる。

それで少しばかりシグナム一行がたじろいだ瞬間、異形の行動は早かった。

骸の異形が緑の異形を抱え、目にも止まらぬ速度で空へと飛び上がり、遠くへとその闇に姿を消してしまっていた。

その行動は一瞬、その様に、改めて異形の力を感じたヴィーター一行は、様々な疑問を持ちつつ帰還するのみであった。

その日の緊急会議、もちろん内容は密輸事件と異形の出現について。そして、ヴィーター一行から聞いた異形の特徴から、異形の識別コードネームが決定されたのである。

緑の異形・・・「アンノウン未確認1号 グリーン Green・Hopper」・ホッパー

骸の異形・・・「アンノウン未確認2号 パープル Purple・Skull」・スカル

それらの決定は、機動六課が本格的に未確認についての調査を行うことを証明するものでもあった。

Count The Storys 1

異変と出現と始動

#2 (前書き

結論

バッタ&mp・紫マジロー

日の光が輝き、人の心をなにかに誘うような今日の日。

そんな日にはどこかにぎやかさを感じるもの、特にミッドチルダの都市部のような人の交通が多い場所であつたらなおさらだ。

しかし、太陽とは相反に、まったくの人の気配を感じさせない一帯、ビルは形をとどめているだけのモニメントと化し、まさに「捨てられた街」。

ここはミッドの北部に存在する、通称「廃棄都市」、正式名称「廃棄都市区画」。

この時期を考えると5年近くとなるであろうか、臨海第8空港で起きた大規模火災、ロストロギア「レリック」の存在が原因となり、すべての始まりの一端であつた事故。

その事件によつて問答無用に空港は閉鎖に追い込まれ、その近隣は余波によつて廃棄された。

ここは、その際に廃棄された一角、いわば事故の爪跡であり、改めてロストロギアの危険性が再確認された証明でもある場所なのだ。廃棄、という言葉は皮肉にも適切で、かすかに下水道機能が生きているだけの、ただの抜け殻。

人の出入りなどあるはずもなく、あるのは風の吹き抜ける音とその合間に強調される沈黙の一種である。

・・・だが、とある廃棄ビルの屋上に耳をよく傾け、澄ましてみると、不意と拳や蹴りが空を切り裂く音が聞こえるのだ。

声は無く、ただただ拳、足が空間を射抜き、時折にボディに強く打ちつけられる音も見受けられる。

音とテンポから予測して、おそらく格闘の練習などでもしているのであろうか、音の強さと刻みから、よほどの力と技量を見受けられる。

実力者ならば一目見てみたい、とバトルマニアの人物なら考えるであろうが・・・その音の正体、音を発している犯人の姿を見た瞬間、大部分の人物らは戦慄するであろう。

拳と蹴りを繰り返している人物、否、異形、その姿は骸を象るバフオメツト。

もう一方の異形、その拳と蹴りを受け身している姿、緑を基調とし、バツタを象る人型のなにか。

その姿は、緑の異形が、骸の異形に格闘を教えている最中なのだ。骸の異形がかなりの圧のかかった格闘の動作を繰り返すも、緑の異形はその跳躍力と脚力、基本的な筋力を駆使したフットワークで回避を繰り返していく。

時に緑の異形のボディに拳や蹴りが撃ちつけられる時がありながらも、基本的には大きいダメージはなく、これぐらいのものなら慣れている、といった様子だ。

その時間、一時悠久なものかと感じることもあったが、終わりの時は必ずやってくるものである。

お互いに距離を取りあい、これまたお互いに大きく一礼、これらが終わりの合図なのである。

異形らはお互いに向き合い、静かに傾き合うと、2人は外の景色に視線を預けながら、おもむろに今の状況、および進歩の度合について語り合った。

「この短期間でかなり進歩してきたな。」

「いやいや、やっぱり格闘に関してはあなたには・・・。」

「それはお互いの特性の違いがあるからだ。君には私よりも大きな力を持っている、すぐに私を追いぬくさ。」

そうして、緑の異形は静かにサムズアップ、骸の異形もそれに返し

た。

この2人の異形が邂逅したのは、1週間前、お互いにこの世界で生を受けてから1週間が経過した節目の時のことであった。

ミッドの郊外、そこにあるとある研究機関の発掘現場で、岩盤沈下による生き埋め事故が起こったのだ。

生き埋めにあったものは12人、幸い死者はなかったものの、そのまま1時間経過したならば12人全員窒息によって死亡する状況、さらに地形上唯の地上からの出入り口も余波によって塞がり、管理局の救援にも時間がかかる、まさに頭を悩ませる状況に置かれた、その時であった。

自慢の跳躍力によって地形をもろともせず、緑の異形がその助けを実行すべくやってきたのだ。

偶然近くにいたところに聞こえた轟音、それを聞いたとき、自分のなかにうごめいている正義の理念が、刹那の時も待たずに体を動かしていた。

この場所にやってきたからには、自分は人を助けるべきだ、と早速と生き埋めの人々を助けようと行動に移す・・・ところなのだが、異形は状況を冷静に分析していた。

この状況で考えられるプランは、自分の雷撃によって岩石群を粉碎すること、だが、少しの刺激で岩盤が再び沈下する、または決壊するのではないだろうか、という可能性が考えられたのだ。

しかし、自分は格闘に自身は少々持っているが、岩石群を粉碎するほどの脚力は無い、故に八方ふさがり、もはや手詰まりかと思われた、その時であった。

不意と、太陽光を一瞬にさえぎる空の影、大きな翼をはためかせ、かなりの速度でこちらに向かってきている。

その影は、背中に光を浴びながら、対照的に地面に接近してきたときはゆっくりと、その翼を動かし、まわりに心地よいぐらいの風圧

を発生させ、その影はこの地に降り立った。

頭は骸を象り、背中にはしなやかな翼、体に見受けられる異形の様は合成獣、紫を基調とした様、そう、ミッドの裏で広まっているもう一つの都市伝説の存在、骸の異形だ。

お互いに近くにいたために、気配を感じた異形2人はその気配に目を配る、その時、お互いに強く感じたのだ、自分と同じような存在、同族に近いものだ、と。

人間から見ればとても人懐っこい性格をしている骸の異形は、その姿にまったく尻込みせず、初めまして、と軽く一礼。

それを見た緑の異形は、相手に戦いの意思はない、と悟ると、無言で軽く一礼を返す。

その刹那、お互いにこの場所にいる理由、お互いがなにを成すためにここにいるかを感じ、緑の異形が提案した。

それは、自分の雷撃で岩盤を壊したいのだが、決壊の可能性がゆがめないで、なには解決策はないか、という質問に近いもの、骸の異形はその問いに頭を捻り、少々のシンキングタイムを取った後に、異形は思いついた。

善は急げ、と骸の異形は提案を述べる、それは、自分が周りの岩盤を、自分の氷結の力によって固めて、できるだけ決壊は防ぐから、その間に岩盤を破壊してほしい、というもの。

緑の異形はその提案に文句は無く、納得の意を表すように大きくうなずくと、骸の異形も大きくうなずき返す。

お互いにこの日が初対面、どれだけの力量があるかわからない、だが、自分達が同族だ、と直感で感じたときから、お互いに一定の信頼を置いたのかもしれない。

決断からの行動は早く、すぐさま骸の異形は力を解放、大きな咆哮を上げると、まわり一帯が氷の世界と化した。

その様になるまでは一瞬、その力量に、やはり間違っではないなかった、と緑の異形が心で納得、その後、時間を置くことなく緑の異形は生き埋めの要因となっている岩盤を雷撃と骸の異形によるエネルギー

ギー弾によって破壊、その空間の先から12人の人達を視認した。

その後、緑の異形はその跳躍力で、骸の異形はその翼による安定した飛行によって、12人達を無事な場所まで送り届けると、一端、2人はその場から離れ、お互いに顔合わせを行った。

お互い、自分の直感、自分の中にある「欲望」によって動いている、いわば人助けを行っていること、自分はなんでこの世界に生きているのか分からないこと、お互い今までなにをしてきたのか。

その話をしていく後に、お互いに同じような理念で動いていることに親近感を覚え、骸の異形が一緒に行動することを提案したのだ。

その提案には、緑の異形も賛成の意を露わにしていた。

緑の異形は、ここ最近自分の力に及ぶ限界を感じており、このままでは完全なる理念の遂行ができない、と危機感を覚えていた最中、実際に今回の件においても、おそらく骸の異形の協力がなければ遂行できなかったであろうから。

それを考えた緑の異形は、快く協力を容認、その瞬間から、ミッドチルダの都市伝説コンビが結成されたのだ。

なぜ緑の異形が格闘を教えていたかというと、共闘していくうちに、骸の異形が自分の格闘経験の無さに気づき、緑の異形にノウハウを軽く教えても立ったのがきっかけ。

その後、興味があるならば自分が教えられる範囲で教授しよう、という緑の異形の心遣いによって、廃棄都市に根城を置き、こうして毎日のように拳を打ちあっているのだ。

風が静かに吹き抜け、それに緑の異形はやすらぎをかすかに感じている、その時であった。

2人の聴覚、そして、自分の中にある感覚、人の感情、欲望の抑揚を感じ取ることのできる感覚が、不意と感情の高ぶりと欲望の増幅

を感じたのだ。

このパターンは覚えがある、おそらく、都市部のどこかで何かの事件が起こっている、感情の高ぶりと欲望の増幅は、その犯人のものである、と悟る。

異形らの決断は早く、お互いに大きくうなずき合い、これからの行動をお互いに認識する。

自分の中にある理念、唯にある欲望のために、異形2人は、緑の異形はビルとビルとの間を跳躍によって移動し、骸の異形は翼を大きく開き空を翔ける。

こうして、また1つの正義が為されていく、それがここミッドチルダの日々となりつつあるのだ。

ミッドチルダの科学は、地球とは違う方向性ながらも、一步先をいったものである。

発達した通信技術もその例で、地球ではカメラとカメラを通したテレビ電話、というものが存在するが、ミッドの通信端末、地球で言う携帯電話は、もはや画面を通して顔を合わす通信など当たり前で、地球以上にマルチタスクな面も見受けられる。

もちろん、純粋な地球人である火野映司と伊達明は、そんな高性能な科学に触れるのは初めてであり、鴻上から端末を渡された時は関心の声を上げていた。

そして今、その性能が発揮されるときで、火野と伊達、そして火野に憑依しているグリード一行は、地球にいとある人物と連絡を取り合っていた。

比較的スレンダーな体型、トレードマークのごとく定着してしまった黒い服と、左腕に指定席を置いている小ぶりな人形、通称「キヨちゃん」が画面に視線を向けており、それと比例するかのよう、その人物もキヨちゃんに対し常に外さない視線を送っている。

画面を介して話すのであれば画面に視線を向ければいいのでは？と一般人は思うであろうが、これが彼、真木清人のスタイルであり、一番の特徴でもあり、正直、ネックでもある。

『どうでしょうか？グリード達、なにより、火野映司君自身の様子は。』

「こっちは基本変わりませんね。みんないい子ですよ。」

火野が定期的に連絡を取り合っていた唯の人物が真木で、それはお互いに体の状況を確認するためのものでもあり、居候の様子を確認する行動でもある。

彼、真木清人も紫のメダル保持者であり、常にグリード化の危険を背負っている、火野と同等の立場にいる唯の人物、また火野以上にデータの面でグリードについて詳しい人物でもある。

『グリード達はまだしも、一番危険なのはあなた自身ですよ、火野映司君。私が3枚保持しているのに対し、あなたは7枚、グリードの意思が宿ったコアメダル1、2枚でも抜ければすぐにグリードとなってしまうのですから。』

火野映司は、体内にコアメダルを持ちながらも、人間として居続けられている特殊な存在である。

大きな要因として、彼自身が欲望によってグリード化を抑えつけていることと、憑依しているグリード達がそれに加勢している。

グリードとは、本来欲望の暴走を満たすためにしか動けないものなのであるが、紫のメダルの特性である「無」によってその欲望が緩和され、そのメダルの副作用を抑えるためにグリードが憑依している、いわば火野とグリードの関係は、「持ちつ持たれつ」といった表現が適切なのだ。

しかし、グリード化という力を無理やり押さえつけているのが現状、引つ張り続けたゴムがその分力を発生させるように、負担をかけ続けたグリード化の波は、一旦解放されてしまったら、その抑え続けた時間分、一気に進行してしまうのだ。

真木が心配しているのはそれで、小さなきっかけ、一定の紫のコアメダルの力を使ってしまった場合もそれとなるので、火野は力をセーブしているの。

例として、ひったくり犯を拘束するときに、本来、メズールの水流がなくても、空気中の水分から氷結させることができる、しかしそれはメダルの力を行使してでの行動、力をむやみに使用した場合の危険を考え、映司はメズールの水流を使い、それに便乗するように軽い行使を行った。

そういった判断をしていくしかないほど、火野のグリード化の危険性が跳ねあがっており、真木は危険視しているのだ。

少しの談話を行った後、話は真木側の居候の話へと移った。

「そういえば、チエト君の様子はどうですか？」

『彼は相変わらずです。この前は研究室を半分荒らされて少々困りましたが・・・、話しますか？』

「はい、お願いします。」

火野が笑顔で返事をする、真木は静かに目をつぶる。

その刹那、真木の左手が、一瞬にして異形の者へと変化したのだ。赤を基調として、どちらかと言えば美しい、というよりふてぶてしい印象を受けるそれは、アंकの右手の写し身、それもそのはず、その正体はアंकの他のタカメダルに宿った、もう一人のアंकの人格なのであるから。

『映司だ、久しぶり。』

「うん、久しぶり。ほら、アंकもなんか言ったらどうだよ。」

「どうもまだ慣れないんだよ。俺の左手が勝手に話すのは。」

『アंकも、どう？元氣だった？』

「・・・ふん。まつ、久しぶりにアイスを食べたから機嫌はいいがなあ。」

800年前と現在、とあるきっかけで生まれたアंकのもう一つの人格、他のグリードがいなく、真木のグリード化を抑える人員を探した結果、そのもう一人のアंकに一任したのだ。

真木は3枚のメダルという、火野よりは比較的少ない負担で済むため、もう一人のアंक、チエト1人に任せ、ひとまず成功した、その後、博識で、知識量豊富な真木に感化され、アंक以上に賢くなっているのはここだけの話である。

しかし、右手だけの異形と、左手だけの異形が話す光景はなんともシニールで、伊達は「なんとも面白いねえ」と言いながらセルメダルの整理をしていた。

話はまた移り変わり、これからの予定について真木と火野は話していた。

地球での仕事に踏ん切りをつけ、ある程度の準備を済ました後に、ここミッドチルダに真木は住居を置くらしい。

『僕自身、科学者としてそちらの技術には興味がありますからね。それに、君の体の検査や、バースの調整も行わなければいけないですし・・・。』

「お待ちしてます。チェト君も、また今度会おうな。その時はいっぱい遊んでやるから。」

『うん！楽しみにしてるよ、みんな。カザリも、またチェスをしようよ。』

「今度は負けないよ。こっちだって意地があるからね。」

再会の契りを軽く交わし、映司は通信を遮断した。

こうして、悪と正義が動く裏で、一時の平穏を噛みしめるものもある。

青年が守った平和、人、そして異形であるグリード。

「自分のやったことは、やっぱり間違ってた……。」

こうして、楽しそうなグリードの姿を見ると、映司は心の底から自分の為したことへ誇りを持てるのだ。

・・・しかし、平穏も、永遠という言葉はない。

おもむろに昼食を食し、こちらの食文化に理解を深めていた火野と伊達、早速食後のアイスを要求してきたアंक他のグリード一行に、ゴリラカンドロイドの鳴き声が聞こえた。

このカンドロイドが知らせるのは、グリードやヤミーの出現・・・この世界での初仕事の報せであった。

火野映司の行動は早かった。

早速としてその出現場所へと全力疾走、伊達はその背中を見届けて行った。

なぜ、バース装着者である伊達明が現場に行かないかと言うと、それはドクター真木からのとある助言に関係あった。

「そちらの世界では銃火器といった質量兵器、というものを嫌悪しており、法律でもこの世界に入れることさえ禁止されています。それにはそちらの歴史に関係してくるのですが・・・そこは自分で調べてみるというでしょう。」

「話を続けます。そういうこともあってか、普通の質量兵器以上の危険性を持っているBIRTHシステムの存在が管理局にばれてしましますと、とても面倒なのですよ。火野映司君のグリードの力は、その世界ではまだ一種の魔法である、とごまかすことはできませんが、バースに関しましては見られた時点でアウト。ですから・・・バースを使うのはあくまで、それを使うしか打破できない状況下の時のみ、としてください。」

だが、火野映司がいたら大体の問題は解決できるでしょう、と追加の一言。

バースシステムが使えない、となったら、伊達は一介の人間でしかない。

彼もさまざまな修羅場を体験してきた身だが、魔法が使えるこの世界の人間と比べれば、ただの一般人と変わらないのだ。

ミッドの商店街、というよりは料理店が並んだ一種のグルメ通り、と言ったらしいのだろうか。

野菜を中心としたブイオンスープの香りから、思いつきりスパイスが効いている香りまで、その食欲をそそる匂いの様は一樣に違いがあり、それぞれの個性、それぞれのこだわりが窺い知れる。

そんな活気にじみ出ている通りを全力疾走で走っている青年、火野映司も、約1年間多国籍料理の店にお世話になった、及びそこで働いていたためか、その匂いが鼻に着くたびに、「この匂いはあの料理かな？」とか「この匂いはなんだろうか？」などの思いや疑問、思い出が時として蘇る。

彼、火野映司は、コアメダル関連の出来事に巻き込まれる前は一介のしがない旅人であったため、旅先の料理には触れる機会が多々あり、それと関連してくる各々の思い出がある。

しかし、一番印象深かったのは、居候先であり勤め先でもあった多国籍料理店「クスクシエ」の店主、知世子が、昼食の提供、いわばまかないで出してくれた料理であるような気がする。

理由として思い当たる節はある、旅先では、どうも火野自身、人と深いかかわりを持つことを避けていた傾向があったと、火野は感じていたのだ。

かといって、火野は内向的でコミュニケーションを作れないような性格ではなく、むしろその性格と人間性、なにより嘘はまったくつけない正直さもあるため、人とかかわりなどいくらでも作れるはずなのだが、そこまでの深い人脈はなかった。

自分でもわからないが、火野は客観的に振り返ると、もしかすると人との関わりを作ること、その人と別れる悲しみを怖がっていたのでは？」と本人談。

旅人との出会いは一期一会、出会いの先には、自然の摂理として別れが待っている。

もちろん、旅人である火野は、出会いと別れに人並み以上に慣れて

いるはず、「別れ」に恐怖を抱くことなど、同業者からみればおかしいと思うかもしれない、だが、火野が言っている「別れ」とは、お互いにこやかな笑顔で手を振りあう別れではなく、おそらく「何かの不測の事態により、目の前で死なれてしまうこと」だと思われる。

高校生時代からの彼の夢、それは「世界中の子供たちが笑っている世界」。

言葉だけでも、なんとも純真で、眩しく、理想的で、難しいことが、誰もが知っているであろう。

そんな面を知っているからこそ、大多数の人々は「そうならいい」とは考えるも、結局は理想論、と見切り、人並で、手の届く平穏な生活を目指す、それもそれでとても幸せなことであり、持論ではあるが現実的でベストだと思われる。

だが、火野映司はその大多数のなかには含まれない、いわば「行動するもの」であった。

貧困国への、個人としては多額すぎる寄付金、支援物資、さらには自らの足で内紛地域に旅をすることもあった。

まさにその行動は人から評価されるもの、綺麗事を実行した青年は、実際にそのような評価を得て行った。

・・・だが、個人1人の力、体では、人と人との争い、というものは人間の遺伝子に染みついた負の歴史を終わらせることなど、やはり叶わない夢であったことを、映司は知った。

その先に待っていた、自分の思いとは相反する現実、周囲、それが同時に降りかかり、理想と現実とのジェネレーションギャップによって、「今」の火野映司が完成されたのだ。

今の彼の唯の欲望でもあり、夢でもある願い・・・「すべてを救える手」。

誰にも理不尽な理由で死んでほしくない、傷ついてほしくない・・・そんな願い、そしてその願いを強くした過去があったからこそ、彼

はこのクラナガンの街を走っているのだ。

自分が半人間半グリードの異質な存在だからこそ感じれる、グリード、ヤミーの気配、その中心地に向かい、映司は駆けていた。

ここミッドチルダで確認されているグリードまたはヤミーは、話によれば「無償での人の救済」を行っている、いわばおそらくそれを「欲望」として動いている。

一見その事実を聞こえがよいかもしれないが、火野曰く「行きすぎた正義は暴力」だ。

実際に、正義を欲望としたヤミー、バッタヤミーの歪んだ正義の行きつくところを知っているし、そういったことが原因で争いを生んだ国や地域、小さな村をこの目で実際見てきたからなまじ理解してしまっている。

火野の知っている大多数のヤミーは、詰まる所人を傷つけてしまっている結果を出している、ある程度の認識や独自の理解を持っているグリードと違い、ヤミーは単一として欲望の感情しか持っていないため、悲しくても「その存在を倒す」ことしか選択肢はない。

欲望に吞まれ暴走した結果そうするしか道は無い、純粹に欲望を追い求めていたものは殺すしかない、それは文面的に酷ではある、だからこそ映司の気持ちには焦燥感が積もっているのだ。

映司のグリードの一片としての感覚が、目的地への接近、到着を知らせる。

それと同時に、映司はある多次元料理の店の近くへと到着した。店のニュアンスからして、おそらくクスクシエと同じような類の見せであろう、近くに来たならば名のごとく様々な香りが楽しめる、と予想できるのだが・・・。

そんな食欲を増長させる類の匂いなど皆無で、あるのはさきほどまで緊迫、否、依然として、いやそれ以上に緊迫している雰囲気を感じている店内の様子と、年相応とはいえないボロボロと涙を流し、

助けを請う、足と腕を凍らされた男の集団5人、そして・・・その様子を見ながら、いや、監視しながら仁王立ちしている緑の異形・・・あの姿は周知している、自分が都市伝説を聞いて最初に思い出したヤミー、バツヤミーと、先ほどの状況のためか、以前恐怖に震えている店の客一同、いや、おそらく恐怖の理由はほかにある・・・頭は骸、紫を基調としたボディ、合成獣の面を垣間見せられる混沌、なにより映司、否、映司達が驚いたのは・・・その姿は、まさに映司自身がグリード化した時の姿と瓜二つであったのだ。

その映司グリードもどきは、その恐怖を覚える姿とはまったく相反して、覚えている客一同に「もう大丈夫ですよ。怪我は無いですが」などと心配している、が、それはまったく一同の耳に聞こえていない様子で、むしろ声をかけられるたびに理不尽な恐怖を覚えられてしまっている。

その姿、その動作、そしてその優しそうな青年のようなグリードの声を聞いた、映司に憑依しているグリード一行は、口をそろえてこう述べた。

「あれ、映司じゃねえか。」

「映司、映司がもうひとり。」

「僕の耳と目が正しければ、あれは映司だね。」

「あああ、あなた、グリードの双子でもいたの？」

「あきらかに映司だな。俺の目と耳と虫の報せてきな感覚がそういつている、絶対に正しい。」

「・・・俺って、はたからみればあんな感じなの？てかメズールさんのコメントおかしいでしょ？」

緊張感はどこへいつてしまったのか、その姿似つかわしくないグリードの様子に、異形慣れしている面々はおもむろにコメントを出しあっていた。

その様子と気配に気づいたのか、謎のグリードとバツタヤミーが、同時のタイミングでこちらに視線を向けていた。

だが、それを見た2人の異形も大層に驚いた様子らしく、時折頭をかきながらとまどいの嗚咽を発していた、そんなところを見ると、正直人よりも人間臭い、と感じたのは映司一行。

「・・・あれ？その気配、俺がもう一人？」

「・・・見た目的に、おそらく紫のグリード・・・だよな？でも・・・」

『どうみても映司が2人です（だよ）』

「・・・面妖な。気配を複数感じる。」

まったく同じような反応をした紫のグリード、それにやっと「自分の写し身みたいだ」と自覚する映司、それにまったくの同意を見せるグリード一行、それに比較的冷静、というよりハードボイルドに一言を放ったバツタヤミー・・・姿以外はシリ阿斯生分皆無な様、だが傍から見れば2人の異形に見つけられ、いまにも襲われそうな人間に見えてしまう、実際、恐怖におびえ聞き耳たてずの客一同にとっては、お互いの正体を探り合いながら殺気を放っている光景、理解と誤解は紙一重、とよく言ったものだ。

だが、そんな現状を完全に理解しているわけもなく、異形2人と映司一行の間には、驚きと困惑、なにより「疑問」という2文字が大きく渦巻いている。

しかし、悠久な時などの生き物でも嫌うようで、その状況を打破しようとして口を開いたのは、何を隠そう明確な目的があつてここにきた映司だ。

「・・・ところでそちらは、今まで行った何を？」

「え・・・あ、ああ！いや、この店が強盗にあつて、て知って、それで早速捕まえたところなんですよ。」

「・・・そういうことだ。」

と、バッタヤミーが示すのは、カツチカチに容赦なく凍らされた手足の持ち主である犯人集団。

それを見た映司一行、特にバッタヤミーについてよく知っている映司とアंक、そしてウヴァは見解の相違にさらなる疑問を生み出すしかなかった。

バッタヤミー、そしてそこにいる映司もどきグリードの目的、つまり欲望は、予測するに「正義を為すこと」これに関してはバッタヤミーは変わらない。

だがしかし、映司の知るバッタヤミーと、目の前にいる犯人集団ににらみを利かせているバッタヤミーとは、内面的なところで相違があるのだ。

バッタヤミー・・・人一倍正義感が強い男、神林進の欲望によって生まれた昆虫系のヤミーで、その欲望は「正義感」。

しかし、欲望に囚われしものに理性というものもなく、行きすぎた懲悪、正義によって「暴力」しか生み出せなかった。

そんな行きすぎた正義との相違・・・それは、明らかに目の前のバッタヤミーからは「独立した人格、理念」を感じることだ。

あのバッタヤミーは、映司の知る限りでは、まるでうわごとかのように、悪への憎悪を述べているだけの、映司いわく「人形」、だが

目の前のバッタヤミーからは、憑依しているグリード一行のような人間で言う「自覚」、「理性」、そして「個性」を感じる・・・詰まる所、映司の知っているヤミーの立ち振る舞いではない。さらに、目の前にいる映司そっくりのグリードらしき異形、映司一行は、これが自分の追い求めていた存在だと勘付いたが、正直疑問が倍增し、この異形2人に聞きたいことは多々ある。欲望のままに行動するヤミーとは違い、この異形らには話を通じる理性があるため、もう少しコンタクトはとれないだろうか・・・そんなことを模索していた時、その刹那であつた。

【S o n i c M o v e】

外からかすかに聞こえる無機質な男の声の電子音声、それとの刹那、その同時のタイミングに、映司と異形らとの間を陣取るかのように、金色の閃光、それに追尾するかのように鳴り響く空を切る音。その閃光の速度が想像異常なためか、空を切る音は轟音に近いものとなり、映司と異形らは現在位置から2歩前後身を引いてしまう。繋がる刹那の文字、アクションの移り変わりは一瞬、その閃光が姿を消したかと思えば、その閃光の中から、なんと人影が見えるではないか。

昼でも、否、昼の光満ちる時間帯だからこそ映える金髪、そのロングインテールの風に流れる様は一瞬見惚れるもので、同時に背中にあるマントも視界にでかかと介入してくる。

その容姿は、一般人多数が感じる「美人」といえる分類で、顔もここミッドチルダの現地人にはよく見知られている顔。

その女性、金髪の、黒の服装の女性は、気圧を感じさせながら開口一番を飾った。

「その未確認！^{アンノウン}一般人に危害を加えるのはやめて、管理局に投降してください！」

その言葉は、あきらかにバツヤミーと映司そっくりグリードに発せられたものであり、その意向を重々示すかのような証として、女性は一両手で黒のボディを持つ、金色の鎌の切っ先を異形に向けている。

だが、それと相反した様子で、紫のグリードは「いえいえ！まったくそんなことは！」とジェスチャーすら繰り返しながら焦っており、バツヤミーの方など「またこのパターンか……。」とため息を吐いていた。

バツヤミーのあきれている要素は、自分を見た目で判断されていることではなく、ここ最近こんな風に管理局員に出会っては、状況を見ずにこちらに武器を向けてくる「状況理解力」のなさに嘆いているのだ。

おかげさまで、こんなパターンを繰り返し、拳句には2回ほど目の前で悪事を行っていた犯人を逃がしてきて、また捕まえに行く、という二度手間を経験してしまい、今回の事件の犯人相手には、少々凍傷を残す可能性に申し訳なさを感じながらも、いつも以上の強度の氷結を頼んだ、とい閑話もある。

ともかく、相手側の女性には敵意しか感じられない様子で、説得は通じない、と異形2人は思考。

そもそもなぜこの異形らは管理局の追手から逃げているかというところ、答えは明白、異形らにも「自分の存在は異質である」という自覚があるから。

自分の存在は世界に騒動を起こしてしまう、だからこそ影から人を守る、というなんともけなげな心遣いであるのに、管理局はこの心遣いをどうも無駄にしてしまう傾向があることに、バツヤミーはほとんど困り果てていた。

この状況で取るべき行動は一つ、悲しいことではあるが……。

「……逃亡御免。」

「すみません！あと、そこにいる犯人さん達をよろしくお願いします。」

「そんなことさせな・・・うわっ!？」

謝罪の言葉を述べた後の行動は、女性の高速移動並の速さで移り変わった。

紫のグリードが不意と大きく、しなやかな紫の翼を一瞬で広げ、店内に開眼さえ難しいほどの強風を発生させ、その目くらましの刹那の間に、グリードはバツヤミーを抱え、割れた窓から目にもとまらぬ速さで空へ飛び立ってしまった、詰まる所逃げ去ってしまった。あきらかに手慣れている手口、逃げられたことに少々の悔しさを噛みしめる金髪の女性、しかし彼女もこういったことに慣れているのか、頭の切り替えは早かった。

悔しそうな先ほどまでの顔はどこへやら、いかにも心配そうな赴きで、先ほどの異形に襲われそうになった（ように女性からは見えた）青年の元へ駆け寄る。

「大丈夫ですか？怪我は？」

「あ、いや、怪我はないですけど・・・それよりもはやくあの人達を・・・。」

「・・・怪我がないなら安心しました。私はこれにて失礼します。」

・・・心配される要素に心あたりのない映司であるが、さきほども言った通り、慣れているためか行動の切り替えは早く、そんな言葉を残し女性は犯人集団の連行へと行動を移す。

しかし、その女性の顔を間近に見た映司、否、映司と力ザリ、そし

てメズールといったある程度頭が回る者たちは、あの顔に引っ掛かるものがあつた。

そしてその引っ掛かる要素をいち早く確定させたカザリが、不意と口を開くのだ。

「映司、あの人確か、フエイト・Ｔ・ハラウンっていう人じゃなかった？ほら、昼食の前に読んでた雑誌に書いてあつた。」

「私も思い出したわ。Ｊ・Ｓ事件を解決に導いた機動六課、という特集記事に載つてた、確か・・・執務官？だつたかしら。」

その言葉を聞いた映司も確実に思い出した、そうだ、伊達が「この世界の情報源」と言つて買つてきた雑誌の特集記事に載つていた人物、最初は後ろ姿だけで分かりづらかつたが、容姿端麗なその姿は記憶に刻み込まれるものであつたことは覚えている。

やっぱり、この世界に来たからには、色々ろ調べてみないといけな
いかな？

と、映司は多々の疑問を抱え、自分の拠点へと戻つていくのであつた。

正義を為し続けていく、爆散したはずのバッタヤミーと紫の映司そ
っくりなグリード。

それら未確認の存在に、過度な危険性を自ら見出してしまっている管
理局の面々。

謎が謎を呼ぶ状況に置かれてしまった、事情をまだ知らない映司と
グリード一行、伊達。

この3つの要素は、この世界に何を為す？

u
b
e
H
E
R
O
?
N
e
x
t
C
o
m
i
n
g
O
O
O
!
C
a
n
y
o

第一話終わりました。

未確認、という呼称は、みんなも勘付いている通りクウガやアギトへのオマージュです、はい。

未確認に過剰反応な管理局、まあ、大きな事件が起こって間もないせいでもあるので、みんなはフェイトちゃんを責めないでやってください。

今見直してみると、なんとも同じような言葉回しばかりで、少々自信がメルトダウンしてしまうのですが、それは割り切りましょう、うん。

後、この小説のタイトルは思い切りオーズなのですが・・・実を言いますと、他の平成ライダーからもキャストが来る予定です、しかもこれまた例外的な。

もしかすると近いうちに出てくるかも？

それではノシ

今回の話の設定は、おそらく賛否両論となるものですが、温かい目で見てください。

思いつきり、この作品は序盤のバツタ達もこれからの展開ふくめ自己満の塊です。

感想で、この方針でいいか聞きたいですね、めんどろだと思われませんが、よろしく願います。

人によってはよろこぶ・・・と思いたいなあ。

と、言いますか、まず8人のNEVER、て言う時点でかなりの地雷臭しますしねえ・・・うわやめろなにをす（ry

不快にさせた場合にそなえ、今のうちに謝罪したいと思います。

ネクロ Over、通称及び略名「NEVER」・・・「死」という固定的概念を、文字通り「超えた」存在。

その正体は、現代科学の粋を集めて完成された、死人をある意味蘇らせる、まさに神の所業に真っ向から喧嘩を売る、人間の愚かな創造の一つ。

大きな欠点がいくつかあるものの、その特徴としては、人間離れした身体能力、どんな即死に至る損傷でも耐えうる人間離れした耐久力、再生能力。

その動く様は死人とは思えないながらも、いくら骨が折れようと、心臓が打ち抜かれようと笑って余裕を出している様はまさに死人としか思えない、能力的にも人道的にも矛盾を背負う、本来、許されざる存在。

そんな存在に対し、一般人はまさに「死神」やら「地獄からの使者」とも言うし、なにより実際そんな2つ名があつてしまっているのが現実、そう、その2つ名の通りに、彼ら、NEVER 8人は世界をまわっているのだ。

傭兵集団「NEVER」・・・テロリストの掃討などの危険気まわりのない仕事を受け、各地の紛争地帯や街を「地獄」と化した、不死身の集団。

正確には、そうした荒事を行っているのは5人中心で、他の3人は比較的穏やか、とは言ったものの一般からしてみれば危険なことには変わりのない仕事を受けている。

先ほども述べたとおり、NEVERの構成メンバーは8人プラス1人。

組織であるNEVERのリーダーであり、この世で最初のNEVERとなった男、そしてNEVERの生みの親でもあり、その人物の母親でもある大道マリアの息子……統括者、だいどうかつみ大道克己。

NEVERの副リーダーであり、組織のムードメーカーらしきポジション、自称レディーの1人である、世間一般に言われる「オカマ」である男性……副リーダー兼NEVERの艶やかな鞭使い、いすみきよ泉京水。うすい

その眼光はまさに猛禽類、生前の通称「青の鷹」と呼ばれたSWAT一の狙撃手でありながら、死人の体を引きずりながらも家族を愛し続ける男……NEVERの青の鷹、無慈悲な狙撃手、あしはらけん芦原賢。

NEVERの怪力、縁の下の力持ちを体现したかのようなその強靱な肉体はまさに熊、棒術にも精通し、こよなく自然を愛している大男……NEVERのパワーソルジャー、うしなもとにまひる堂本剛三。

NEVERの紅一点でありながら、その女性らしさを感じさせるフットワークとしなやかさ、死人らしからぬ情熱を持ち、時として冷酷さも垣間見せる表裏一体の様……NEVERのファイアレディ、はねはら羽原レイカ。

そして……NEVERのTOP3、その情報解析力と整理力には秀でるものがあり、NEVERの参謀役、なおかつ個性派ぞろいであるメンバー勢を取り結ぶまとめ役……NEVERの頭脳、まつい松井誠一郎、通称「マツ」。

マツの唯一無二の相棒であり、他のメンバーとは一定の距離を持ちつつ、自分の信念を貫き通すハードボイルド、そして裏社会での通り名「骸の裁断者」を持つ自称「死人探偵」……NEVERの外

なるみそつきち
れ狼、鳴海莊吉。

その口調は元セールスマンの雰囲気を感じながらも、その話術の秀でる面からNEVERの交渉役となっている優男、なにより自分の「町」を心から愛し、その未来を誰よりも大切にする男・・・NEVERの交渉人、ネゴシエーター そのさききりひこ園崎霧彦改め須藤霧彦。すとうきりひこ

そのメンバーらを影から支え、NEVERという存在の成り立ちを考えるならば、彼らには無くてはならない存在、大道克己の母であり、彼の心の中にある正義を密かに願っている女性・・・NEVERの生みの親、プロフェッサーマリア、人の名を、大道マリア。

危険な場所に赴き、思いつきに暴れるのが仕事（京水談）である彼らだが、仕事がない、いわフリーの日の彼らには、地獄の使者、という名を忘れ、それぞれのやりたいこと、やるべきことを為す。まあ、その前に、仕事もなにも無い日など、3か月に一度の割合なのだが・・・。

傭兵集団、とはいえども、その面が見られるのはどちらかと言えば仕事の時のみであり、個性派ぞろいなメンバーであるため、まるで童話小説などに出てくる陽気な海賊集団、という表現がぴったりか。そのにぎやかさが、とある1人の女性の存在によって、さらなる加速をしているのが現状だ。

「いい！レディーの料理つてのはね！その人への愛と！純情を！惜しまなく入れ込むものなのよ！」

「愛と・・・純情・・・？」

「そう！私は克己ちゃんと！霧彦ちゃんと！莊吉ちゃんに！惜しまなく！ぎゅうぎゅうに！見て！料理に愛を流し込んでいる私は！ま

さに曲線美よ！くねくねよおお！！」

今、京水に料理のいろはを教わりつつも、明らかに次元違いなテンションに戸惑いを示している女性、名前をミーナという。

少し前、とあるテロリスト集団掃討の任務において邂逅し、そこから始まった「クオークス」及びその背後に感じた財団Xの影とのビレッジでの戦い、その戦いの後、実験動物でしかなかった生き場のない彼女を、莊吉と克己が見兼ねて、こうしてNEVER基地兼研究所においてかくまうこととしたのだ。

ミーナもまた、行きすぎた科学によって運命を左右されてしまい、人には過ぎる力を得てしまった人の1人、異質である存在に自分の存在を重ねたための同情か、はたまた克己と莊吉の人の心がそう願ったのか・・・その真実は誰にも知らない。

しかし、この場にいるもの達の様子も、なんとも一者一様で、京水は知って通り、今まで料理を作ることがなかったミーナに、この組織レディー？代表として料理を厳しく・・・というより我流に教え込んでおり、にぎやかな食堂をよそに、研究所の一室の隅では芦原が丁寧にスナイパーライフルの手入れを行っている。

ところ変わって研究所の戦闘訓練室では、紅一点のレイカと、怪力の堂本がそれぞれの得意とするもの、レイカは軽いフットワークからの流れる蹴りと拳、堂本は怪力による拳の一撃とそのダイナミックさに驚きすら覚える棒術によって、まさに人外な模擬戦闘を行っている。

お互いに自然と笑みこぼれているところを見ると、バトルマニア戦闘狂であることがうかがえてしまう。

ぱっと見、この研究所内に、リーダーである克己の姿が見えないが、彼はマリアと一緒にこれからの活動方針について研究所の奥出話し合っているようだ。

こちらは研究所の様子だが、この場所の存在はもちろん公にはなっ

ていない。

ならばどこにあるのか、という質問が浮上してくるであろう、実を言っと、この研究所とはある事務所の地下にでかかと建設されているの。

アメリカの郊外、その郊外の裏通り、一見そのような施設があるなと思えないようなうす暗く、人気のない場所、ここにNEVERの本拠地、そしてその隠れ蓑兼荘吉、マツ、霧彦の隠れ探偵事務所があるのだ。

もちろん、基本目立ってはいけなないので、わざわざ探偵事務所を示す看板などない。

だが、世界の暗部、つまり裏社会では有名な探偵事務所で、いかなる危険な仕事でも金がある程度積めば確実に遂行してくることから通称「仕事人」と呼ばれている。

しかし、この探偵事務所が、全世界で有名な傭兵集団並び犯罪者集団の隠れ蓑に、はたまた事務所の主である荘吉以下事務所メンバー3名がその組織のメンバーである、という事実は一般にあまり知られていない。

実際、この探偵事務所にいる3人、荘吉、マツ、霧彦の様子を見た者は、そういった仕事を主とするものだと第一印象では見えないであろう。

「今日は比較的静かでゆつくり日だね、荘吉。」

「・・・俺たちに、平穏はない。」

「まあまあ、そう気張らずに。荘吉さんも、コーヒーはいかかですか？」

「・・・もらおう。」

平穩に見える今日を再確認するマツ、比較的口数少なく、タイプライターで何かの書類を書きあげている莊吉、あくまでリラックスを見出そうとする霧彦。

こういった光景がある今なら、平穩と安らぎを求めるマツと霧彦の気持ちも理解できるものだ。

しかし、彼ら、特に莊吉は「骸の裁断者」と呼ばれる実力者、なおかつ、外れ狼であるながらも、彼も傭兵の1人。

・・・真なる平穩などないと、彼自身が一番自覚しており、現実もそうなのであるのだから。

事務所の扉が3回ノックされ、客人の来訪を知らせたのは3人がコーヒーを飲んでいた時のこと。

その刹那、霧彦はお得意の営業スマイルを浮かべながら「どうぞ」と簡単に一言。

やはり元セールスマンだけに、こういった対応の心得は会得している様子。

その声にいち早く反応し、その扉は呼応するかのごとく開かれる。客人と思われし人物は、20代前半だと予想できる女性、きつぱりとしたレディーススーツを着用しており、典型的なキャリアウーマンを彷彿とさせる。

ただの客人、この探偵事務所の客人であろう、と霧彦は予想したが、莊吉1人はその探偵に備え付けられている直感の一種で、只の客人ではない、と思っていた。

・・・そしてその直感が、良くも悪くも当たり、なおかつこの平穩をぶち壊しとするものであった。

「クライアント
依頼人の代理できました。傭兵集団NEVERの皆様。」

その声にいち早く反応し、今すぐに招集を要請したのはまとめ役の

マツ。

その後の集合は早く、事務所の仕掛け扉、一見荘吉の帽子掛けのスペースに見えるそれから、そろそろとNEVERのメンバーが集合していく。

その様は先ほどの様子とは打って変わり、雰囲気はまさに仕事人、レイカと堂本も、生ける人間であつたらかなりの発汗をしているはずなのだが、NEVERは死人であるため代謝がない、そのためまったくの疲れた様子もなくここに集合した。

合計8人、まず、交渉役である霧彦を中心として、任務の確認を行う。

「それでは、依頼の内容を確認させてください。」

「・・・その前に、とあるお方からお話があります。」

霧彦の問いかけに答えるよう、女性はどこから取り出したのか、とある大きめのディスプレイをメンバーの前に出す。

その刹那、デン！と大きめな電子音が鳴ったのは一瞬、その音量に一般人は驚くこと間違いなしであろうが、修羅場を駆け巡った彼らに動揺の色はない。

さらなるその刹那、その画面に光が宿り、画面にとある中老の男性が映り込んだのも一瞬、その男性の見知らぬ顔に相変わらずのノーリアクションではあるが、それをよそにその男性は笑顔で繰り出すのであった。

『初めまして！NEVERの諸君！私が今回の依頼人である鴻上ファウンデーション会長の鴻上光生だ！』

ただ、鴻上ファウンデーション、という名が出た瞬間、克己はにやりと微笑した。

鴻上ファウンデーション、表では一般的に言われる大企業であるが、裏では色々な意味で有名な会社、噂では「世界の40%を掌握している」とも言われている、力がある企業だ。

その大企業の会長直々の依頼、というのだからかなりの高収入が期待できるであろう。

だが、克己が期待したのはそこだけではないのだが、その内心は誰にも知らない。

「それでは・・・鴻上会長、依頼とは何でしょうか？」

『・・・その依頼を説明する前に、君たちには世界の事実、というものを説明しなければならぬ。』

「真実・・・で、しょうか？」

『そうだ。・・・君たちは、異世界、はたまた、魔法、というものを信じるかね？』

？マークを浮かべるメンバーをよそに、鴻上はそれらの単語についての説明を始めた。

この世界は次元という筒の中にある多々の世界の1つでしかなく、次元には様々な異世界が存在すること、その中の1つの世界「ミッドチルダ」を中心とした「魔法」と呼ばれる技術概念の存在のこと。しかし、あまりにも唐突な上に突拍子な話に困惑と疑念が渦巻いているのが現状の事実、だが鴻上はまだ笑顔でいることからこういった事態は予想済みらしい。

『それは困惑もするだろう。だが私から見れば、死人がそうやって動いている、ってことのほうが驚きだけだね。』

その言葉を聞いた一同は、やつととして動揺の色をかすかに見せた。なぜならば、一部の裏の人間しか知らない、普通ならば知りえない事実、自分たちの正体をを、この目の前にいる男は知っている赴きでいるからだ。

さらに笑顔を見せている様子を見ると、おそらくどうやってNEVERが存在しているか、ということも知っている、そういった予想を立てた克己は、その情報収集能力を評価しながら、さらに笑みを浮かべた。

『話を続けよう。今までの話を聞いて勘付いている人もいるだろうが・・・君たちには、早速その世界、異世界ミッドチルダに行ってもらいたいのだよ。とある任務を遂行するためにね。』

「その任務とは？」

皆が顔を険しくしているときでも、やはり霧彦は優秀な交渉人、いかなる時でも笑顔は絶やさない。

『うむ。君たちには、しばらくその異世界で私の指示に従い動いてほしい。もちろん、長期において動いてもらうのだから、金は弾むよ。』

「どれくらいで手を打ってくれるでしょうか？」

『ふつ、そうだね・・・1回の仕事につき、最低1500万でどうだろう？もちろん、拠点の準備とあちらでの生活の充実を約束しよう！もちろん、仕事によつてはさらに倍！どうだろう！なかなかいい仕事ではあると思うのだが？』

「なるほど、それはまた太っ腹でいらっしやる。・・・リーダーは、

「どうでしょうか？」

「・・・おまえ達はどうする？」

早速依頼受諾を決意した克己だが、その視線を莊吉ら3人へと向けた。

そもそも、なぜ彼らがあまり他の5人と行動しないか、それは莊吉の「暴君共の悪事に手を貸すつもりはない」という意向によって行動を共にしないのだ。

一緒に行動するときは、自分の目的と一致した時や、その依頼の内容によって変わるので、通称「外れ狼」も納得である。

だが、その推理力、格闘能力、その態度は他のメンバーからは一定の信頼を置いており、実際外れ狼ながらも影のまとめ役として働いている。

だが今回は、莊吉の顔を見る限り乗り気ではないらしく、莊吉が否定の意を言葉にしようとした時、鴻上が介入、否、爆弾を投下してきたのだ。

『そういえば、会社の情報網がキャッチした情報でね、なんと！ミッドチルダのとある場所にガイアメモリの工場があるのだよ！』

その言葉を耳に入れ、表情が明らかに変わったのは莊吉、克己、そして霧彦。

一方は多大な期待を込めた笑みを浮かべ、一方は視線と表情が一層と険しくなり、もう一方も何かの敵意に近いものを感じる。

鴻上の推論だと、わざわざ異世界に建造したのは、ガイアメモリの存在を知らない異世界で製造し、なおかつ異世界の存在を知らない地球人の目から逃れられるという2つのメリットがあるからだろうと予想。

そして、その工場の存在によってもたらされる可能性・・・それは、

その世界でメモリが広まる可能性があることだ。

なぜ鴻上がそのような情報を持っていたか、予想されるは財団X系列にスパイがいることであろう、だが、今考える問題ではない。

鴻上のこの情報を伝える意味、それは単なる「餌」でもあり、意義でもあった。

「この男、確かに鼻はよく効くし、頭もまわるようだ」と克己も関心している。

その話を聞いた莊吉一行は、少しのシンキングタイムの後に、鴻上が図った通りの返事を返すのだ。

「・・・同行しよう。ただし、基本はいつもと一緒だ。」

「ふん。・・・依頼人さん、その依頼、喜んで受けるぜ。ただし、向こうでの行動は、依頼以外は自由にさせてくれよ。」

「もちろんだよ！ただし、あまり名の売るようなことはしないほうがいい。向こうはこっちと勝手が違うからね。・・・それでは、詳しい話はそこにいる里中君に聞きたまえ。私はこれにて失礼するよ。」

その返事に大変満足したためか、一層と大きな声を荒げながら笑い声を発していた。

その言葉を最後に、大きな嵐は一旦として台風の目を見せたのだ。

その後は鴻上の代理である女性、里中エリカとの長時間における会議、内容は、向こうの世界での処遇、手はず、報酬金の振り込みなどなのだが、異世界での仕事、とはいったものの一般的な事務処理だけの話で終わり、詳しい手はずが決まった。

ミッドチルダへ出発するのは1週間後、拠点付近において転送し、任務申請時までは自由に行動していいこと、なにか必要な準備物が

あれば申請すること、など好条件が重なっていく。

その処理を行っていたのは主に、リーダーである克己と事務担当でもある霧彦、その好環境、十分な報酬金に大きく2人はうなずき合っていた。

・・・その裏で、莊吉は居候であるミーナを呼び出した、目的は、向こうに滞在する間のミーナの安全確保について、自分達がこれから遂行する任務及びその危険性の説明も織り交ぜてだ。

彼女は超能力を扱えし存在、その存在のためかさまざまな危険が降りかかるであろうし、向こうに連れて行くにもそこはそこで危険が付きまとう、なおかつ彼女の存在は、言っては悪いが邪魔となる可能性も歪めない。

確かに彼女は優れた超能力の資質を持ちし者として実験動物の人生を強要されてきた存在、だがNEVERの行う仕事との必要な力とはこれまた違ったものがあるのだ。

長期における滞在任務、向こうは元の世界とかなり勝手が違うため、正直完璧に守りきれぬ自信がないのも本音の1つであった。

莊吉は異世界に行こう、と決意した瞬間、ミーナの処遇について疑問が浮かび上がったのだが、その問題は早急に解決したらしく、ミーナにこれからの指示を煽っていた。

「いいか、俺達が出発したら、お前はこの場所に向かって、メモに書かれている2人にこの手紙を渡せ。・・・ただし、俺達、特に俺のことは伏せる。」

「でも、この人たちも危ないんじゃない？・・・。」

彼女が心配するのも無理はない、相手は大きな影と力を持つ財団X、ガイアメモリの存在もあってか一般人に太刀打ちできる相手ではない、と組織に関わってきたミーナがよくわかっているのだ。

だが、彼女の心配する様と比例するように、自信のある声で、一層と帽子を深々とかぶり直しながら、自分の中にある確信めいた予測を述べるのだ。

「心配はない・・・とはいえない。確かに、そいつらは半人前。だが・・・文字通り体を張って、お前を助けてくれることは、確かだ。」

その声は、かすかに懐かしむものを感じるもの、その背中には似合いすぎるほどの哀愁。

そしてその顔は・・・かすかに、微笑していたようにも見えた。

ミーナが莊吉に渡されたメモ・・・日本のとある住所、電話番号、そして・・・。

「風都 鳴海探偵事務所 左翔太郎 フィリップ」と、確かに書かれてあった。

その夜、克己から伝えられた、ミッドチルダでの初仕事。それは・・・。

「1週間後、ミッド北部のガイアメモリ工場の襲撃を行う。」

工場の襲撃、及びそのガイアメモリの奪取。

それは、ブレッジで出会った「E」のメモリと出会うための布石。そして・・・異世界で、NEVERの名を刻む記念すべき「花火」でもあった。

その男は、死人の体を引きずり、なにかを求めていた。自覚などない、だが傍から見ればそれは明確なもの。

仲間、同類、自分が異質な存在だからこそ求めたもの。

それは俺達7人の運命を180度狂わせ、「永遠」と錯覚する偽の「生」を与えられた。

次に求めたもの・・・それは、死人である彼にとってとはとつくの昔に奪われた「明日」。

その冷たい体を引きずり、あくまで現世で為したいこと。

それを男は探し続けていた、ただし、生きとし生けるものには保障されているそれが、死人などにあるはずなどない。

ならばどうすればいいのか・・・男は考え、きっかけによってそれの答えを見つけた。

だったら自分で作ればいい、それをつかめばいい、探して、探して、死人なりにあがけばいい、と。

そして、男は大きな「変革」を行おうとした。

裏の大きな影を根絶やしにし、この世に大きな「花火」をさかせよう・・・と。

求めたのは力、大いなる力を使いし資格がある、と男は気づき、それを手に入れようとしている。

そして、死人を統べる男は明日を、「永遠」の力に必死に手を伸ばし、死人たちはそれに黙ってついて行く。

死人たちは、はたしてどのような気持ちでいるのだろうか？

自分の中にある「欲」を満たすため、自分の中にある「何か」に応えるため。

だとしたら俺は、「あの風と風の運ぶ笑顔を、遠くから守るため」と大きな声で言おう。

今、ここには「その風」を愛する者たちが3人いる・・・もしかすれば、4人かもしれない。

一度「その風」を泣かせた俺が言うんだ、死人になるのも悪くはないかもしれない・・・オススメはしないが。

S・M

(とある男のタイプライターによる記録及び手記)

1週間、という期間は生けるものはもちろん、死人たちにもあつという間なもので、武器の調達やら準備やらをしているうちに、あつという間に経過してしまうものだ、その期間中3回仕事があればなおさらなものである。

しかし、NEVERの一員がおもむろに準備している中、とある小さな問題点が見つかったのである。

それは・・・異世界ミッドチルダでは、質量兵器が元の世界以上に嫌悪されて、なおかつ元の世界よりも厳しく取り締まりがされていることだ。

話によれば、拳銃をちらつかせただけで最低10年は監獄のお世話になるとか・・・。

この話、異世界の常識が大きな問題点となる理由、それは芦原賢の得意とするものが狙撃だということ。

NEVERの大きな特徴として、飛躍的な身体能力があるため、他

のメンバーはさほど大きな問題にはならなかったのだが、芦原はそれを専門として、能力はあるものの格闘経験はさほどない。

だとすれば、向こうの世界に代替できるものはないか・・・とマツが提唱したのだが、克己はそれにあざ笑いながらこう言った。

「生ける人間の法に、死人が縛られる必要があるか？」と・・・その言葉には、自分たちにたいする皮肉があるのと同時に、おそらく、克己の考えるプランも関係あるだろう。

ミッドにあるガイアメモリ工場を襲撃する理由、それは財団Xにさらなる存在の強調を行うことと、可能性の1つとして、「T2ガイアメモリ」の回収だ。

「T2ガイアメモリ」・・・研究施設「ビレッジ」のデータベースからマツが拝借してきたデータに記述されてあった、ガイアメモリのtype2、文字通り新型だ。

旧型との大きな相違、それは「生体コネクタを必要としないこと」、「メモリブレイクされないこと」、そして「メモリが人を選ぶこと」。

そしてデータベースでの記述、「ひとたびなにかの事故によって町などにはらまかれた場合、メモリ自体が人間に入り込み、意思のないドーパントとして暴れまわるだけである」。

財団Xはなんとハタ迷惑なメモリを作ったのか、と荘吉と霧彦、マツ談。

その自由性、厄介さを考えると、同じ「町」を愛するもの達の見解は同一のものであった、「これを風都に流通させてしまったら、面倒にある」と。

それは主なる3人の見解であるが、克己はその特徴に他の可能性を見出していた、それは「生体コネクタを必要としない」という特徴。人間が使用する場合、財団の者がコネクタ手術をする必要があり、しないものが使用した場合メモリの毒素によって体を痛ませることとなる、それによって簡単に手を出せないのが現実。

しかし、コネクタを必要としない、ということは、財団から敵視されているであろうNEVERの者達にも、手に入れることができれば戦力として「ガイアメモリ」を使用できる、ということだ。ガイアメモリの力を手に入れば、これから敵として送り込まれるドーパント達に抵抗できる、それどころか掃討できる力となる。これからの戦いにもっと大きな力が必要となる・・・そんなことを思わせていた矢先に手に入れた道しるべ、そして一時出会った「E」のメモリの力。

それは、克己の意思に確かな「明日のやるべきこと」を疑似的ながらも示されていた。

(ミッドチルダ現地時刻 AM5:30)

(ミッドチルダ北部 財団Xガイアメモリ工場付近 森林地帯の一角)

ここに、男7人と紅一点、合計8人の影、言わずと知れた、NEVER一行の影だ。

もちろんとして、それぞれお得意の武器を引っ提げての来訪、京水は鞭を、堂本は棍棒を、芦原は法律お構いなく特性のスナイパーライフルを背中に両手にはマシンガン2丁、克己、レイカ、霧彦、マツは死人ご自慢の身体能力を持つ肉体、そして荘吉は・・・腰に、ロストドライバーを。

「荘吉、一番乗りは任せたぞ。」

「荘吉ちゃん！先陣は任せたわよ！」

唯一無二の相棒として荘吉の背中を押すマツ、レディー？代表としてラブコールを送る京水、荘吉を静かに見ているメンバー、それを

背に受けとめながら、かぶっている黒の帽子を一層に深くかぶり直し、莊吉は静かに工場へと向かっていく。

なぜ先陣を切るか、それは1人近づくものあれば、おそらく警備をしている者たち勝手に、それもあなどつてくれながら出てくれるから、なぜ莊吉が先陣なのか、それは・・・NEVERの総合的な強さとして、莊吉はトップであり、信用できるからだ。

莊吉が一定距離近づいた瞬間、莊吉のみに照らされるスポットライト、それと同時に5人の男性、それも手に杖の形をしたなにかを持ちながら、莊吉の元へ走ってきた。

近づくな、と典型的な脅迫文句を言いながら、接近を制止させる5人だが、莊吉がそれにひるむはずもなく、それを無視し接近を続ける。

警告は無意味、と5人は判断すると、早速とばかりに杖の先を莊吉に向け、光球らしきものを生成、それにそれなりの速度を加え、莊吉の元へと放った。

しかし、それを回避できずのうのと被弾する莊吉はたまたNEVERではない、あくまで小さなアクションで回避した莊吉は、光球はガイアメモリの力か？と疑問を持つが、この世界の特徴を思い出し、不意とつぶやいた、「これが魔法か」と。

まだ戦意などおとろえていない5人をよそに、莊吉はその身体能力によってありえない速度の接近、これまたありえない腕力で男の1人を殴りとばし、早々に退場させた。

その様に驚きを隠せない4人、本当に人間か？と1人はつぶやく、が、それは皮肉めいた一言でしかない。

莊吉は視線を動かし、次なる1人に蹴りを入れる、かと思われたのだが、その足は寸で止められていた、男の手から生成された、魔法陣の防御盾により。

異能の力、しかし莊吉は驚きはしない、これもまた魔法なのだろう、と理解しているからだ。

その刹那に放たれる魔力弾、だが莊吉に被弾はしない。

5メートルにも及ぶという跳躍によって、莊吉は4人と一定の距離を取り、4人の様子を見る。

そしてそれを見た4人は、果たして血の気が多いのか、それとも人間離れしたその様に焦ったのか、その男4人は懷から長方形のなにかを取り出した。

莊吉は、そのなにかへの因縁が、不意と視線を鋭くする。

「ガイアメモリ・・・か。」

「ほお、これを知っているとはねえ・・・けど、これが見納めさ！」

その言葉を啖呵に、4人はそのガイアメモリのスイッチをONした。

【マスカレイドMASQUERADE】

マスカレイド・・・仮面舞踏会の記憶が収められたそれを、男どもは右首筋にあるコネクタを挿入し、その場所を皮切りに体（正確には見た目上に変化したのは顔だけ）を変化させた。

使用者の身体能力を向上させる効果を持ち、一般に多く流通し、時には財団の戦闘員ともなるドーパント、マスカレイド・ドーパントが、おもむろに視線を莊吉へと向ける。

その視線は確かな殺気を感じ、さきほどの侮り、油断が完全に消え去っている。

それは戦闘にも反映され、生身の莊吉にお構いなく、魔力弾を多量に放ち、時には中距離の砲撃も放たれ体様が今。

その攻撃にみすみす当たりに行く莊吉でもないが、内心しんどさも感じていた。

マスカレイド・ドーパントは、NEVERだけでも十分に対処できる下級のもの、だが相手が魔法を使うなら別問題だ。

格闘しか能のない本来のマスカレイドとは違い、遠距離からも仕掛けてくる魔導師のマスカレイド。

勝手が違う戦いに押され始める莊吉、その劣勢が、莊吉にある決意をさせた。

「どうしたあ？動きを止めた、ってことは、降伏かな？」

「・・・俺はあまりこれを使わない主義なのだが・・・相手が相手なら別問題だ。・・・他の奴らも待たしているしな・・・。」

「はあ？なにをほざいて・・・そ、それは！？」

男の1人は、莊吉が懷から取り出したそれに驚きを隠せない。

それは、まだこの世界に流通させてない、この世界でなら、財団の関係者以外には所持できないはずの代物・・・ガイアメモリなのであるから。

さらに男は驚きを覚えることなるのはその刹那、莊吉は黒のスーツをどかし、腰にあるそれを男に示す。

男は、それがなんなのかを、不幸にも知っていた。

財団のデータベースを覗いたとき、不意と好奇心に駆られ、その存在を知った、しかし、同時にその力も知ってしまったていた。

ガイアドライバーの一種で、ガイアメモリ1本の力を最大限に解放する、いわゆる変身アイテム。

赤を基調とした、「ロストドライバー」であつたのだ。

【SKULL^{スカル}】

骸・・・骸骨の記憶が収められたそのスイッチをON、独特な電子音声を鳴らし、莊吉は、改めてこの「鎧」を背負う決意を、黒の帽子を一度脱ぎ、この言葉で静かに示すのだ。

「・・・変身。」

【SKULL】

スカルメモリをドライバーへ挿入、再び鳴り響く電子音声、その一瞬で、莊吉の体は一層と強靱な肉体へと作りかえられ、「骸の裁断者」の名の元となった姿へと変化するのだ。

莊吉は頭に再び帽子をかぶり、その視線を一層とした殺気で返した。首には黒い、ボロボロのマフラーを締めており、体は人間の亡骸を模したもの、顔も、まさに骸骨という表現が似合ってしまう不気味さ、死人である彼にはびつたりすぎる姿・・・仮面ライダースカルが、ミッドの地へと現出した。

「クソッ！面倒な奴を相手にしちゃった！」

その言葉の通り、先ほどからマスカレイド・ドーパントが戦闘や魔力弾によつて必死な攻撃を行い続けているのだが、さきほどの劣勢は影すらなく、スカルはその本人の自慢の身体能力が相まって、ドーパントでも真似ができないほどの格闘戦を見せている。

跳躍によつて攻撃をかわし、格闘ではほとと太刀打ちはできない、さらには魔力弾は被弾するどころかその腕力ではじかれる始末、格闘能力は極限に高まり、盾、プロテクションは砕かれてしまう。

そして、その一方的な戦いに終結を呼ぼうとしたのは、紛れもなくスカル、その示しとして、どこからかスカル専用の武器、スカルマグナムを取り出し、ドライバーからメモリを取り出す。

トリガーの限界突破による必殺技・・・マキシマム・ドライブでの布石であった。

【SKULL！MAXIMUM DRIVE！】

マキシマム

ドライブ

スカルマグナムにメモリを挿入し、マキシマムドライブを発動、その刹那、マグナムから強力な破壊光弾が4発、マスカレイドに向け発射された。

だがそれにマスカレイド抵抗しないわけもなく、それぞれ魔力光が違う魔法陣の盾を展開し、その光弾に抵抗の意思を見せる。

だが、所詮は一介の一般魔導師の展開した盾、魔力資質は優れたものではなかったらしく、さらにはそのマキシマムドライブの強大な威力によって盾を貫通、光弾はマスカレイドにクリティカルヒットし、悲鳴を上げながらマスカレイドを地面に伏した。

そして、それぞれのマスカレイドは、メモリブレイクされずにそのまま消滅する、という特徴にのっとり、粒子となって消滅したのだ。

その様子を見計らい、待機していた残りの7人も前へ出る。

お互い、これから出てくるであろう敵の手ごわさ、先ほど思い知らされた面倒さに警戒している様子で、一方筋金入りの戦闘狂である堂本は敵の手ごたえありな様子に舌舐めずりしながらはちきれんばかりの期待を秘めている。

これからの行動の手順はこうだ、これからあふれんばかりにでくる刺客を手分けして足止めし、どこかにあるガイアメモリの保管場所に突撃、メモリを確保したのちにそそくさと逃走、T2の場合はメモリを使用し、この工場を派手に破壊、その後逃走、といったいかにもシンプルなもの。

しかし、人間離れた力を持っている彼らにとっては、小細工ばかりの作戦は返って分が悪く、こうした力任せなものの方がその能力を思う存分に発揮できる。

だが、NEVERという存在は、一定時間、細胞意地酵素を供給しないたちまち消滅してしまう存在、そのためそのタイムリミットまでに遂行する必要があるのだ。

限界はそれぞれが準備してきた予備の酵素の量を考え、朝の7時ま

でが限度、それが任務のリミットであり、NEVERの集合時間でもある。

「さあ、死神のパーティータイムと行こうじゃないか！」

その言葉が伝えるは、これから始まる縦横無尽に人が飛び交う戦いの合図、自らを死神と罵り、死人だと笑いながら述べる者達の異世界での初仕事、名を刻むための記念日。

それを高らかに宣言する克己、その彼の指は、天に眩しく輝く、地球では見慣れない2つの月を示していた。

魔法を使うマスカレイド、結構強い・・・と思いたい。

劇場版ではスカルにフルぼっこされたから活躍が見れて光栄です・・・

・ 結局フルぼっこですけど。

克己からパーティータイムが宣言さえ、どれほど時間が経過したであらうか。

NEVERの砦として、この工場地下部に、霧彦とマツが走り回っていた。

他のメンバーはどうしたのか、という疑問が浮上するであらう、だが決して、他のメンバーが倒されたわけではない。

そもそもこのガイアメモ工場に突入したのは今より約30分前、見た目以上の広大さに手を焼いていた彼らに、予想通りマスカレイド・ドーパント、財団からの刺客が多数やってきた。

最初の群を担当し、足止めを始めたのはレイカ、京水、堂本、その中堂本と京水が妙なハイテンションでドーパントを相手にし、その場は辛くもその3人以外は脱することができた。

だがしばらく奥部に行き、地下部への入り口を発見し早速とばかりに突入しようとしたタイミングで、マスカレイドの第2群が襲来、先ほどより数は少ないため、2人で十分だ、と克己は芦原とその群へと突撃し、残りの莊吉、霧彦、マツが2人を残し地下部へと侵入に成功。

その後は敵の気配なく、ずんずんと進めていたのだが、ここにきて道が明確に2つへと別れた2又通路にさしかかったのだ。

一瞬判断に迷った霧彦であるが、莊吉とマツはいたって冷静、ここは片方をスカルに変身できる莊吉に任せてもう片方を2人で行くべきだ、と合致しら意見を述べた、まさに息があった2人。

その後は莊吉を別れ、こうしてマツと霧彦が奥部へとどんどん進んで言っている現状、おそらく他のメンバーはまだ倒れてはいないだろう、と希望的観測を立てる、だが実際にあの大群をやりしのごだけの実力は全員にあるのが真実だ。

その歩みを止めない2人の前に、とある自動ドアが立ちはだかった。今までに違う雰囲気と作り、それになにかの確信めいた判断を持つ2人の足は、そのドアへとゆっくりと歩み寄り、ドアの先へと進む。そして2人の視線に飛び込んだのは、銀色の無骨なアタッシュケース、広い空間にたたずんでいる様は違和感しかなく、それと同時に2人は一層とした予感が渦巻いている。

そして早速として2人はそのケースを開けると・・・その中には、USBメモリ型を象った、26本のガイアメモリがあった、それもビレッジから拝借したデータにあった画像と同じもの・・・詰まる所、幸か不幸か、T2ガイアメモリであったのだ。

「ケースがこれだけ・・・というこは、試作品ですかね？マツさん。」

「おそろくね。と、いうことは、まだ量産はされていない、ってことだと思うよ。道理で工場が動いていなかったってわけだ。」

マツはいつもの癖で、情報をまとめるときやしやべりだすときのしぐさとして指を鳴らし、そんな答え合わせを軽く交わす、とにかくこれで任務達成であろう、とかすかな安心感を抱いていた刹那、自動ドアが不意と開かれ、それとコンマ何秒かの動作、2人の目の前にあったアタッシュケースに、一本の太く、白い糸のようなものが張りついた。

それに反応し、動いたのはマツと霧彦の同時、おそらく奪取されると恐れた2人はケースに手を伸ばそうとするが、それに呼応し、その糸は力強くケースを引きよせ、2人の手にはとっさに掴まれたガイアメモリが一本ずつしかなかった。

ケースを奪取した犯人はそこにいる、と2人はドアの方向に視線を動かす・・・そしてそれは、マツにとっては忌々しい異形の姿であった。

頭部は6本足の虫が象られており、左腕は文字通り禍々しい異形の者、それは、かつてマツがその力に飲み込まれ、町を泣かせたときの姿・・・蜘蛛の記憶を駆使するもの、スパイダー・ドーパントであつたのだ。

「まったく・・・ただのコソ泥がここまで来るのはいいが、試作品を持ってかれちゃあ困るんだよ。」

「こんな迷惑なもの、むしろ持って行つた方が平和なのでは？時代遅れのドーパントさん。」

「ほお・・・ガイアメモリについて詳しいようだな。だが、俺はれっきとしたT2のスパイダー・ドーパントだ！」

と、威勢のいい啖呵代わりに名乗ったスパイダー・ドーパントは、腕から10匹前後の小さな蜘蛛を放つ。

それにいち早く反応したのはマツ、急いでその場から離れ、衝撃に備え強く身構える、それに反応した霧彦も同じように身構える、そしてその刹那に、その蜘蛛たちは、威力は小さいながらも、爆風をしっかりと発し爆ぜたのだ。

マツはこれを使用したものとして、蜘蛛が出た瞬間に察することができた、だが旧型の蜘蛛爆弾とはある条件を達したことによって爆発するもの、しかももう少し威力は高いはずだとマツは違和感を感じるが、先ほどのドーパントの一言にからとある推測を打ち立てた。T2・・・つまり旧型とは違う新型のもの、つまりいくらでも改良は可能であるのだ、おそらく条件なしの万能なものとした引き換えに、威力低下は歪めなかつたのであろう。

普通の人間であるならばとても危険な爆発であつたが、NEVERとして耐久力に優れた2人には慣れたものだ、至って無傷な様子な2人にスパイダー・ドーパントは笑いながら感嘆の声を上げる。

だが・・・その余裕そうな声をよそに、明らかに殺気を荒げている男・・・マツがいた。

かつての罪深き自分の姿・・・それとよくも悪くも重なってしまい、町を泣かせようとする者達に加担する目の前のドーパントに、なにより・・・かつての罪深い自分、町を泣かせてしまった自分に、とてつもない憎悪と怨恨が募っていく。

そして、マツと霧彦が不意と手の中にある一本の、先ほど咄嗟に掴んだガイアメモリを覗く。

それと同時に、2人の顔は驚愕なものへと変化したのだ。

だが2人は思い出す、T2ガイアメモリの大きな特徴、それは「メモリ自体が人を選ぶこと」・・・そして2人は、その記述に、この瞬間大きく実感を抱かれたのだ。

一方は「まるで断罪の証だな」と皮肉めいたことを言い、もう一方はそれとの再会に内心喜びを示していた。

「・・・おい、蜘蛛のいけすかないドーパントさんよ。悪いことは言わない。ここは、おとなしく逃げることをお勧めするぜ。」

「ふん！いまさら意気がろうなど・・・。」

「それはこっちのセリフですよ。先ほどの爆発を見るに、あなたは完全にメモリの力を使えていない。その証拠に、私達は怪我ひとつしていない。」

殺気立てながら睨むマツ、にこやかに、あくまで自分らしく言論で攻め立てる霧彦、それに反論ができない拳句、マツの強すぎる殺気に押され気味であるスパイダー・ドーパント、この時点で、スパイダーの優勢の影を無くしていった。

その証拠に、自身は気づいていないだろうが、スパイダーの足がゆっくりと後ろへと移動しているのが見える。

そして・・・2人はためらいもなくその決意を表すかのように、メモリのスイッチを押した。

「それに・・・俺の前で、その姿を見せたときから、お前が倒されることは決定事項だ！」

【SKULL^{スカル}】

「臆病者は、黙って指を加えていなさい。メモリの本当の力を見せて上げましょう！」

【NAZCA^{ナスカ}】

「お、お前達！まさかメモリを・・・いや！T2ガイアメモリは適性のないものが使えば精神が飲み込まれ、そこらじゅうを暴れるだけだ！お前らなどに・・・。」

しかし、それはスパイダーの強がり、2人は返って不気味な笑顔すら浮かばせる。

「こいつと合ってない？そんなわけはないな。これは相棒とペアルックだぞ？」

「久しぶりに再会した相棒に、仲違いなど・・・。」

その笑みにもはや恐怖しか感じれなくなってしまったスパイダーは、今にも逃げ出しそうな腰付きでいる。

だが、この状況でならそんな反応も納得できてしまうのだ。

その笑みは・・・まさに地獄からの使者、死人としか思えないもの。そして2人は・・・同じ「町」を愛し、「町」を守る者たちをそれ

それぞれ思い出し、一方はその無事を願い、もう一方は最初で最後に共闘したそのハーフボイルドとの最後の会話を思い出し、2人はその受け継がれし言霊を信じながら、大きく叫んだ。

『変身!』

それは、「町」を愛し、なお戦う戦士をリスペクトしたもの、それぞれの背中に思いをはせながら、言霊を響かせ、スカルメモリは左の首筋、ナスカメモリは右首にへと吸収された。

その蒼いボディと、仮面の剣士を思わせるルックス、背中にある2本のマフラーは、思いをはせた仮面の戦士を彷彿とさせるもの、高速の剣士、ナスカ・ドーパント。

その顔まさに骸のもの、両肩にはそれぞれ1つずつ骸を背負い、体全体は人の亡骸そのままの造形、そして相棒とのペアルックでもあるその姿、首には白いマフラーを一本締めている、骸の断罪者、スカル・ドーパント。

ここに、罪を背負い戦う本達2人が、戦いの力を得て現出した。

『さあ、お前の罪を数えろ!・・・だったかな?』

「くっくソ!ここは一旦退く!」

さすがに負け試合はごめんだ、とスパイダーは天井に糸を張りつかせ、その場から脱兎のごとく逃げようとする、がそのあがきもはやみすばらしいもの。

逃げることと言語道断、とナスカはナスカウイングと呼ばれる地上絵を模した翼で高速飛翔、すぐさまそのしなやかな剣により糸を断ち切り、スパイダーは無残に地に落ちる。

糸を無くしたクモなどもはや踏みつぶされる運命、その刹那スカル・ドーパントが思いっきり力を込めた拳をスパイダーに叩き込む。

スカルメモリの特性は「身体能力の極限までの向上」、武器も何も持たないそれに与えられたのは、極限までの力、NEVERとしてただでさえ身体能力が優れている彼の限界を超える力となれば、それは多大なる「強さ」となる。

次々と叩き込まれる蹴りや拳、それをまともに受けているスパイダーの体に、着実にそれも確実にダメージは積み重なっていく。

このままでは大敗を期す、と危機感を抱いたスパイダーは、両手からめいっばいの蜘蛛型爆弾を放つ、が、それは目にもとまらぬ速さで翔けている青の閃光によってすべて斬撃によって無力化されていく。

閃光の正体はナスカ・ドーパント、ナスカの力はその飛翔能力と高速移動、生前の霧彦はその力を、やっと高速移動の初歩であるレベル2までしか引き出せなかったのだが、今の霧彦には強靱な肉体がある、そのため生前を軽く超越する高速移動が可能となったのだ。

まさにその様は圧倒的、その強さはスパイダーの戦意を完全にそぐことには十分すぎた。

方向を変えた青の閃光は、すぐさま無数の斬をスパイダーに刻んでいき、その斬が止まった刹那、スカル・ドーパントの胸が大きく開き、エネルギー体の骸骨を生成する、そう、それは生前に受けた仮面ライダースカルの必殺技と似通っているもの・・・その骸骨を拳に纏わせ、さらなるパワーチャージを行う。

そして、マツの大きな叫びとともに、その拳、その骸骨はスパイダー・ドーパントへと直撃するのだ。

その強い威力によって、スパイダーは完全に活動を停止、体は地面に伏し、体からガイアメモリが排出される、そしてマツは、しっかりとそのメモリをキャッチした。

メモリブレイクはT2のためされない、が、排出されたのちに物理的な方法で壊すなら別だ、スカル・ドーパントはその醜い黒歴史と決別するために、そのメモリを握りつぶし、粉碎した。

戦いはひと悶着し、安堵に包まれる・・・かと思われていたのだが、

霧彦が焦った様子でマツに迫った。

「マツさん！アタツシユケースがないです！」

「・・・しまった、ドンパチにまぎれて回収されたか。・・・しょうがない、とにかく、今は苦戦してるはずのみんなを助けにいくぞ。」

「もちろん。」

このままではタイムリミットを越えてしまう、と危惧したマツは、おそらくまだ苦戦を強いられているメンバーを考慮し、急いででの救援を考える。

しかし地下部の奥深くとなるとかなりの距離があり、なにか最短ルートはないものかとマツが考えていると、霧彦がそれに提唱した、ならば自分の飛行能力により2人で天井を貫けばいい、と。

それにマツは指を鳴らし「ナイスアイデア！」と言、それに「光栄です」と霧彦、マツの声は、どこか振りきれたようすがすがしい声であった。

その後、多数のマスカレイドに奮戦していた克己、芦原組にはスカルが、京水、レイカ、堂本組へと向かった。

スカル・ドーパントであるマツは、その身体能力で圧倒的にマスカレイドへと力を示しつつ掃討、一瞬敵意を向けられた克己へと制止をかけ、目の前で変身を解き弁解、すぐさま克己は戦闘態勢を解いた。

それと同時にせっかく見つけたT2を取り逃がしたことを報告するマツであったが、叱咤されることはなく、克己は笑いながら「おそらくまだ工場内にある」と予想した。

一方ナスカ・ドーパントである霧彦は、自慢の高速移動によりあっという間に3人の元へと到着、すぐさま高速の斬撃によって、一瞬にして多数のマスカレイドを退けた。

変身を解いた瞬間に京水に「颯爽と現れる白馬の王子様・・・ターニングポイントよ！」などの多大なラブコールを異常なテンションで受け、堂本が「うるさい！」と一喝、レイカは「これだから場知らずなおじさんは・・・。」と一蹴、禁句を言われた京水が激昂、といったにぎやかな様子であつたが・・・。

さらにその後、克己組と同時に荘吉も合流、荘吉はこの工場の中央コントロール室に到着したらしく、その機材と一通りの機械類を破壊したため、ここはただの箱となつたらしい。

こうしてすぐさまに8人は合流し、これからの行動を模索していたその矢先に、工場敷地内から、なにかの騒がしいモーターの駆動音が聞こえることに気付いた8人、そしてマツは勘付いた、「おそらく、回収したT2を運ぶ気だ」と。

それにうなずいた一同はすぐさま音に導かれながら、さきほどヘリが飛び立った敷地へと到着したのだが、あくまでヘリが飛び立った後、ヘリの姿はもう町の空にあり、任務は失敗、かと思われた。しかし、彼らは地獄からの使者、執念深さは折り紙つきである。

「私が追います！」

【N A Z C A】

すぐさまナスカ・ドーパントへと変身した霧彦は、背中にナスカウイングを展開、これまた高速飛翔によってヘリへと一瞬で接近、ドアを斬撃で切り裂き、アタッシュケースを剣先を突きつけ要求する。

それにのうのうと従うわけにはいかない、だが、ドーパント相手に

生身の人間が太刀打ちできないのも事実、この状況で取るべき行動を考えた財団の運び屋は、手元にあるスイッチをまさぐり、すぐさまブッシュした。

それはヘリの爆破スイッチ、自爆した運び屋2人は空中で爆散、それと同時にケースの中にあつた24本のガイアメモリは、ヘリの下にたたずんでいる街、ミッドチルダのクラナガンへと散らばってしまったのだ。

霧彦が咄嗟に掴めたのは、「C」の文字が示されてある緑のメモリ、サイクロンメモリと、「U」の文字が示された、ユニコーンメモリのみ。

落ちたメモリの詳しい場所など把握できるわけもなく、一旦霧彦がメンバーの元へと帰還し、それをしづしづ克己へと報告する。

もし、データベースの記述が正しければ、メモリは人から人へと吸収され、街はドーパントまみれになることだろう。

それを考えた克己は、メンバーにこう述べた、否、これからやるべきことを示した。

「これから準備を整えた後、メモリが多数落ちたと思われる街、クラナガンへ突入。メモリの搜索及び発見、ドーパントの掃討によるメモリの回収を行う。」

力を求めるための搜索、そもそも、克己が回収を望んでいた「E」のメモリがない以上、克己もあきらめはしないだろう。

ドーパントを相手とするならば、自然と相手ができる荘吉、マツ、霧彦が中心となるだろう。

これから始まるハードワークに、3人は静かにため息を吐いていた。回収できたT2ガイアメモリは4本・・・C、N、S、Uのメモリ、ここに、不死身の集団NEVERの8人が始動する。

夜は明け、現在は現地時刻AM7:00過ぎ、一日のさわやかな訪

れのはずなのだが、クラナガンに平穩は訪れないようだ。
なぜならば・・・まだ、「死神のパーティータイム」は、終わりを
告げていないのだから。

u b e N e x t C o m i n g O O O ! ! C a n y o
H E R O ?

終わりました、NEVER編。

ナスカが相変わらずかつこいいようで安心です、フィギュアのほう
は出来よかったしね。

マツはスカルでした、ある意味皮肉です、はい。

エターナル変身はまだ先、ほら、Vシネマの時も焦らされたから。

次回、またあらたなる来訪者が・・・！

ヒント：また悪役だよ！自分的には上位に食い込むかつこよさ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9001x/>

OOO Cross Story`s ~ Another World`s/Cross Greed`s ~

2011年11月4日04時28分発行